

武藏屋本考

明治廿二年東京神田の書肆武藏屋が淨瑠璃本出版の大成を企て、明治廿九年に迄及んで挫折した。これが明治に於ける淨瑠璃本翻刻の先驅をなすものである。故人の古本蒐集癖は偶々此の武藏屋本に逢着し、搜聚七年の久しきに亘つて終に完本の喜びを得たが、其の間武藏屋本に纏綿せる一切の事情を究明して、細緻極りなき研究を完成し、武藏屋本考の一篇を脱稿した。此の研究は如何に故人が古本を愛着したかを最も如實に表明するものであり、装幀や印刷の微差をも苟くせずに検討した一章の如きは寧ろ驚嘆に値するものがある。故人としては恐らく此の一篇に推敲を加へた上發表する積りであつたらうが、それを果さずして逝いた事が今更ながら惜まれる。



武藏屋本考

(昭和十二年十一月二十一日稿)

院本翻刻の初期

第一期 (明治十四・五年)

近松の作品で、活版に翻刻されたものは、藤井紫影の朝日新聞社本、高野、黒木の春陽堂本をはじめとして、苟くも全集と銘打つたもの、又はそれに近いもの丈でも十數種を數へられ、一と頃續出した日本文藝全集といつたやうな叢書には、必ず一卷又は數卷の近松物を挿まねば叢書の體を爲さず、一篇又は數篇の註釋書、中には士君子の手にさるべくもない三文版式の片々たる偽書も尠くなく、これ等大小共に一部を一種に數へると、近松院本の詞章が活字化された版種は、無慮百種に達し、世の如何なる流行作家もこれに比肩するものはある

まい。近松以後の院本は、或る作者又は或る作品の翻刻された版種こそ近松に如かされ、篇數が多い丈に、その總量は汗牛充棟といふべきで、洵に偉觀を極むる。

語り物として引續き舞臺や高座に生命を持つてゐる一部の淨瑠璃を除いて、これ等近松以下の作品が、徳川の中期以後、明治の初年に至る迄に取扱はれた状態を案ずるに、特に近松物は徳川時代に於て、既に劇としてではなく、讀物として鑑賞されたことは、數種の開版が次から次へと行はれてゐることでも判かるのであるが、これ等古刻の院本も、次第に世人に忘れられて、このまゝ放置したら、一篇又一篇、空しく紙魚の腹中に葬られ去つて、後には内容を知るべくも無きに至つたのであらう。

この湮滅の危機から救つて、新に文藝の一部門として、復活したと云はんよりも、全く別箇の生命を創造したとも云ふべき、院本活字化の事業は、劃期的な功績を遺したものと云ふべきである。

日本古典の翻刻は、一般に明治十四年に創まると云はるゝが、院本の翻刻もその御多分に

漏れてゐない。筆者の知る限りに於てこの仕事のトップを切つたと思はるゝ武藏屋本の『傾城反魂香』が、この年の四月十四日に出てゐるのを切つ掛けに、堰が切られたやうに、數種の翻刻本がこの年に刊行されてゐるのである。

一四・四・一四 武藏屋本 傾城反魂香

一四・四・二五 丸屋善七 やまと文範第一集

(假名手本忠臣藏、妹背山婦女庭訓、近頃河原達引、繪本太功記、花上野譽石碑、

國性爺合戦)

一四・七・一一 時代世話劇種本(一) 曾我會稽山

一四・八・一一 同 (二) 齋藤太郎左衛門 (太平記とまひ隠鏡)

一四・九・一六 同 (三) 生寫朝顔日記

一四・一〇・一四 武藏屋本 百日曾我

一四・一〇・二六 時代世話劇種本(四) 芦屋道満大内鑑

一四・二一・八 時代世話劇種本(五) 本朝廿四孝(上下)

一四・二一・一〇 武藏屋本 戀八卦柱曆

一四・二一・一〇 丸屋善七 近松著作全書第一卷

百日會我・戀八卦柱曆、傾城反魂香

一四・二二・七 時代世話劇種本(六) 心中天網島

以上が明治十四年の産物であつた。

尤も十四年の武藏屋本三巻には疑問がある。この年代に武藏屋はなかつたのであるから、この三本はあるとしても、それは丸善の出版でなければならぬが、前に記した反魂香、百日會我、柱曆のそれぞれの発行日付は、孰れも後日のそれぞれの篇の再版以下の奥付刊記に依つてのみ知らるゝものであつて、筆者は多年それを探求してゐ乍ら、未だその所謂初版の一卷をだに寓目したことは無い。この三篇は『近松著作全書』第一巻の三篇と全く同一内容であつて、刊行の日付から云へば、先づ三篇を順次に出し、最後の『柱曆』が出るのを俟つて

それと同日付で、三篇を合巻して重刊した如く見ゆるが、著作全書には通し頁が附せられてゐて、既刊の三巻を單に合綴したものは思はれず、全書の排列は百日會我、柱曆、反魂香の順であるのに、所謂初版日附による順位は、反魂香、百日會我、柱曆となつて、一致しない點から見ても、別版であることを示してゐる。斯く同一發行者によつて、時を同うする同一内容の出版物が、態々版を改められねばならぬと云ふことは解し難いことであるので、十四年の分冊は實在しないのでは無いかとの疑問が持たれぬではない。即、三篇の再版以下の刊記に謂ふ處の各篇の初版とは、實は『著作全書』第一巻を指すのでは無いかとは、先づ考へらるゝ處である。しかし乍ら、それにしては、所謂三巻の初版の日付が區々で、その二卷迄の日付が著作全書の日付と一致しないことが説明されぬ。

『反魂香』初版日付（一四、四、一四）を、その再版日付（二四、四、一四）とが正しく十年の距りであること、及び『百日會我』初版日付（一四、一〇、一四）が『反魂香』初版（一四、四、一四）と、丁度半年の距りであることが、作爲のあとがあつて、これ等初版の日付

は再版を出すに當つて架空に捏つち上げられたものではないかとの疑問を助くる。

十四年本が實在するや否は、院本翻刻史の第一頁の記述を左右する重要な事項であり、後年の武藏屋本の意義の一半も、それによつて動かさるゝのであるから、何とかして真相を闡明し度いのであるが、明確な否定の資料が出て來ない限りは、少時明示されてゐる初版日付を認容して、後考を俟つ外はない。

今一つ分らないものに「我自刊我書」がある。「近松語彙」にはこの書を「明治十六年刊」としてゐる。半紙二つ折、和装のこの叢書廿七篇、百廿卷（日本叢書目録による）中には、「兼好法師物見車」「碁盤太平記」「鎗權三重帷子」の三篇の近松物を翻刻した一卷を含むのであるが、この卷には奥附を缺き、表紙、題簽等にも何等明示、暗示する處がないので、正確な刊行の期日を知る由がない。（我自刊我書には最終葉の左下の隅を小さく區切つて、簡単な刊記を附してあるのが普通であるが、この一卷の他にもこれを缺いてゐる卷が尠くない。）「日本叢書目録」によると、この廿七篇、百廿卷は、「明治十三年より十七年」とあるので、或はこの近

松物の三篇、一卷は、前記の數書より早い刊行であるかも知れぬが、假令そうであるとしても、刊記が無い以上、記録保持者たる功を讓る外はない。惜しむべきことである。

この三篇、一卷は、後に明治廿二年一月十八日、「戯曲近松集」と題して、同じ書店から、四六版ボール紙表紙の、粗末な版となつて重刊されてゐるが、その刊記も前版に觸れてゐない。

「やまと文範」三卷及び追刊の二卷は、編輯兼出版人として、東京府士族、小野田孝吾（芝區三田四國町廿六番地、第二卷以下は、芝區西應寺町五十一番地）の名があり、それに併べて賣捌書肆として、卷により四五、又は七八の東京、大阪、名古屋の書店名を列記した中に、丸屋善七及び大阪丸善支店の名がある。三卷は各六篇。追刊二卷は各一篇の淨瑠璃を、鵜刻したものであつて、中に一篇の近松物「國姓爺合戦」を含んでゐる。四六版、黒のクロス装幀（追刊二卷は紙表紙）がその厚味と共に後の帝國文庫に髣髴たるものがあるが、十五六年後の帝文が一卷五十錢（後に六十錢、更に七十五錢）であるのに對して、定價各卷二圓

(追巻は金卅五錢)は當時としては驚くべき高價であつたと思はるゝ。編著者小野田孝吾に就ては筆者は知る處は無いが、この年代に於て二十篇の院本を校訂、翻刻した事等は記憶さるべきである。

「時代世話劇種本」は歌舞伎新報社の刊行する處であつて、後に記す處のやうに翌明治十五年に亘つて續刊された、二十篇、二十六卷の翻刻、淨瑠璃本である。半紙二折版、役者の似顔で篇中の主要人物を描いた錦繪風の美しい表紙、少數の挿畫と共に畫工は芳幾である。翻刻された二十篇中、「やまと文範」の同じ二十篇と重複するもの九篇に達するが、「やまと文範」が先に出て、「劇種本」が後になつてゐるものはこの中の四篇で、「劇種本」が先に出たものが五篇である。「曾我會稽山」「心中天網嶋」「雙生隅田川」「信州川中嶋合戦」の四篇の近松物を取扱つてゐるのも有意義であつて、この叢書の功績は「やまと文範」に劣らぬものがある。

「近松著作全書」は書名から云つて、大規模な計畫の出版物であつたらしく思はるゝが、後に記す如く第二卷迄出して已んだ。四六版、假綴ち、第一卷は卵黄色、第二卷は暗綠色の表

紙である。何人の手になつたものであるか、丸善でこれを刊行した経緯がどうであるかは、筆者の最も知らんと欲する處であるが、奥附には簡單に「編輯兼出版人丸屋善七」とあるのみで、全く明かでない。(丸屋善七失跡盾)別に考證する如く「丸屋善七」とは、横濱の丸屋善八、大阪の善藏、京都の善吉等と共に、架空の店名であつて、さうした名の實在人があつた譯ではないから、この仕事に、手を下した人は別にある筈である。この二卷の奥附には定價を記載してないが、明治十五、六年の丸善書店の書籍目録を見ると「二冊一圓」とある。それと並んで記載されてゐる「やまと文範」の「三冊六圓」といふ記し方から見て、「二冊一圓」とは、各卷五十錢の謂であらう。

越て明治十五年には左の諸卷が出てゐる。

- | | | |
|-----------|------------|-------------|
| 一五・二・九—一六 | 時代世話劇種本(七) | 小野道風青柳視(上下) |
| 一五・二・一六 | 同 | 伊賀越乘掛合羽(上下) |
| 一五・二・一六 | 同 | ひらかな盛衰記(上下) |

一五・一・一六 時代世話劇種本(一〇) 伽羅先代萩(上下)

一五・一・一六 同 (一一) 双子隅田川

一五・三・一〇 同 (一二) 近頃河原達引

一五・三・一三 やまと文範第二集

(奥州安達原、菅原傳授手習鑑、一谷嫩軍記、本朝廿四孝、生寫朝顔話、伊賀越

道中双六)

一五・四・四 時代世話劇種本 (一三) 近江源氏先陣館

一五・四・一〇 同 (一四) 鎌倉三代記

一五・四・一〇 同 (一四) 一谷嫩軍記

一五・四・一〇 同 (一五) 祇園祭禮信仰記

一五・四・二九 近松著作全書第二卷

(本朝三國誌、重井筒、姫山姥)

一五・五・二四 時代世話劇種本 (一五) 信州川中嶋合戦

一五・九・四 同 (一八) 彦山権現誓助劔

一五・九・二六 同 (一九) 妹背山婦女庭訓

一五・一・一六 やまと文範、第三集

(平假名盛衰記、北條時頼記、三日太平記、蝶花形名歌嶋台、彦山権現誓助劔、

太平記忠臣講釋)

一五・二・一一 時代世話劇種本 (二〇) 假名手本忠臣藏(上下)

斯の如く、この年の所産は盡く前年よりの繼續事業であつて、新しい計畫は何物も爲されてゐない。(劇種本はその番號一四、一五を重複した爲め、一六、一七を飛ばして、一八に續けてゐる)。

この十五年の、孰れも四月廿九日附になつてゐる武藏屋本の「心中重井筒」「本朝三國誌」「姫山姥」の三卷がある。この三篇の再版以下の刊記は、孰れもこれを夫れぞれの初版とし

てゐるのであるが、これは同一日附の「近松著作全書」第二卷の殘本を、後日になつて、分冊改装したものであつて、新に版行されたものでもなく、この日附に上市されたものでもな
50

この三卷の装幀は、向イ鳳凰丸紋散らしの武藏屋本仕立になつてゐるが、題簽は貼附けられてゐて、張紙の下を透かすと「鎗權三重帷子」「十二段」の文字が二行に記されてゐるの
が見ゆる。武藏屋本版歴の中にこの二篇の合卷は見當らぬから、そうした組合せの版を準備
中に何等かの都合で中止され、ために生じた不用の表紙が、この三卷の改装に流用されたも
のと見るべきである。「十二段」の初版が單本で出たのは、廿二年十一月であつて、「鎗權三重
帷子」の方は、ずつと遅れて、その初版（「壽門松」と合卷）は廿四年十月に出てゐるから、
案ずるにこの二篇合卷の計畫中、「鎗權三」の校訂に疑義を生じたか何かで、これを後廻しに
して、取り敢へず「十二段」を單行したといふのが、その経緯であらう。即、この不用表紙
が出来たのは、「十二段」初版の廿二年十一月の直前であり、それが流用されて、改装本が作

られたのは、その直後であらうと思はるゝ。更に、その廿二年十一月の「十二段」の後付には「近松著作全書」第一、二巻の廣告が出て居り、翌月の十二月十三日付「日本振袖始」後付には、

近松著作全書第二巻分本

○ 嫗山 姥 全一冊

定價七錢
郵税二錢

十五年五月發兌

○ 本朝三國誌 全一冊

定價七錢
郵税二錢

十五年五月發兌

○ おふさ
徳兵衛 重井筒 全一冊

定價七錢
郵税二錢

十五年五月發兌

とあるから、この改装本が出来たのは、廿二年十二月初め頃であつたのであらう。

この三巻の改装本にも前後二版あるやうである。その一種は奥付が「編輯兼出版人、東京府平民、丸屋善七、日本橋通三丁目十四番地」と、極めて簡單で、それは「著作全書」の奥付

の記載と全く同種のものであるが、他の一種は、編輯兼出版人丸屋善七の次に「賣捌所、叢書閣、神田區宮本町五番地」と附加され、及び出版日付の下に「定價七錢」と前版に無い記載がある。「著作全書」と同じ體裁の奥付版がこの時出たものであつて、叢書閣の名がある分は後に出たものであらう。(前版の奥付には「著作全書」の分と同じ二重の枠が取つてあるが、後版にはそれが無い)唯、三巻のうち「姫山姥」の一巻は、原版の奥付が、本文最終頁の裏面に刷られてゐるので、原奥付がそのまま改装本の奥付となつてゐるので、前後版があつても見分けがつかぬ譯である。表紙の貼付題簽には二版共に題名の下に「近松門左衛門作」と並べて「武藏屋藏版」とあるので、奥付の「出版人丸屋善七」、及び後版にある「賣捌所叢書閣」とあるのと矛盾して、改装本である痕跡を遺してゐる。「三國誌」と「重井筒」との奥付は新に作つたものであるから、表紙を同様に「武藏屋藏版」とすることは自由であつた筈であるが、唯原版の奥付をそのまま用ひねばならぬ「姫山姥」があつたので、他の二巻もこれに倣はねばならなかつたのであらう。改装本の表紙は前後二版とも上記の「鎗權三重帷子、十

二段」の流用であり、貼付された題簽も同筆同版であると見ゆる。

明治十六年に入ると、僅に

一六・三・二七 やまと文範

伽羅先代菘

一六・五・二五 同

壇浦兜軍記

の二本が出てゐるのみである。「やまと文範」は前出の三巻が、各巻數篇を載する叢書の形であるのに、追刊のこの二巻は各巻一篇づゝの薄いものとなり、装幀も前三巻がクロス表紙であるのに後の二巻は紙表紙の粗末なものに變つてゐる。

淨瑠璃本翻刻史は、こゝに至つてばかりと中斷して、そのあとに五年に亘る空白の頁を遺し、截然とその第一期を區劃してゐる。活版といふ新來の利器によつて、この古典の一部門を讀書界に復活、普及せしめやうとした企畫は數書の續出によつて、春水到り、百花開くの觀があつたが、實は時代に先行するに過ぎて、當時の讀書人は未だ之を攝取する力を持つて居なかつたのであつた。明治二十二年十二月十五日發行の「貴女の友」に、

曩に丸善近松著作全書と題し、同氏（近松）の著作に係る院本を翻刻し、逐次之を發行せんと計畫せられたりしも、時期未だ到らざりしを以て、僅に六種を上梓せしのみにて中止せり。

とある。これは後に記さんとする武藏屋本刊の際の紹介文の一節であるが、時勢は正しくその通りであつた。

第二期（武藏屋本時代）

久しい中斷期間のあと、院本翻刻の第二期の幕は、「天智天皇」(二二・一〇・一)、「十二段」(二二・一一・九)、「日本振袖始」(二二・一一・一三)を以て、武藏屋本によつて明けらるゝにつた。所謂武藏屋本の刊行はこの時に始まるのである。

細かいことを云へば、武藏屋本に先立つて、左記の二本が出てゐる。斯うしたものは、ただ他にも無いとは云へない。

二一・二二・一〇

繪入けいせい反魂香
略解

米倉末吉校、巖々堂發行

二二・一・一八

戯曲近松集

我自刊我書屋發行

前者は三五版位のボール紙表紙の小本で、この院本の上の巻のみを載せ、巻末に中、下巻續刊の豫告があるが、實現したか否か不明。後者は前に記した我自刊我書の改版である。

この時代は、之を武藏屋本に就て云へば、廿二年の上記の三本に續いて、廿三年から廿五年に至る三年間に、この叢書の大部分に當る三十數卷、四十數篇の初版が續刊され、各篇が盛に重版され、實際は一編のみで天折したが別働隊として「新編やまと文範」の大規模な計畫が立てらるゝ等、華やかな活躍をした全盛期を爲し、以下衰兆を示して、廿六、七年には初版もの僅に一巻づゝ、廿八年には二卷、三篇、廿九年一月「天鼓、吉岡染」の合卷一卷を名残として姿を消してゐる。

この第二期は武藏屋本の獨擅場といふべきで、前期の「やまと文範」「時代世話劇種本」と云ふ如き重味のある本は出てゐないから、武藏屋本の盛衰が即ち第二期の全部であるとして

差支へない。唯この時代の著しい特色として注目を惹くのは、武藏屋本模倣の續出であつて、武藏屋本の隆盛を取りまく應援隊のやうな賑かさを見せてゐる。模倣本は孰れも武藏屋本と同じやうに、四六版、假綴ぢ、三五十頁を以て一卷とする小冊子型であつて、装幀は圖案の意匠こそ異なれ、感じに於て見まがふばかり似せてゐるものが多く、中には向イ鳳凰丸散らしの、武藏屋本に終始一貫した表紙を、そつくり眞似したものすらある。しかし乍ら一生懸命眞似することに努めても、模倣者は終に模倣者であつて、何處とはなしに、品格に於て眞似し切れない何物かゞあることは當然である。武藏屋本は、瀟洒たる装幀の上のみから云つても、愛撫するに足る美本である。

模倣本の一般を擧げて見ると、次のやうなものである。

溫故堂版 「天智天皇」 二三・一〇

天狗百集と題す。續刊の有無不明であるが、一卷切りか。

文學資料（三々文房版）

「(一)天鼓」(二四・二) 「(三)平家女護鳴」(二四・三) 「(五)梶狩劍本地」(二四・四)

「(六)釋迦如來誕生會」(二四・四) 「(八)孕常盤」(二五・七)

文學材料 (文學書院、第四卷より曉鐘閣版)

「(一)女殺油地獄」(二四・三)(この卷のみ「文學叢書」と題す) 「(二)相模入道千足犬」

(二四・三) 「(三)嵯峨天皇甘露雨」(二四・五) 「(四)酒吞童子枕言葉」(二四・六)

「(五)義經新高館」(二四・九)

薰志堂版

我自刊我書後版の殘本を分冊改裝したもの。

「兼好法師物見車」 「碁盤太平記」 「鎗權三重帷子」 (以上二四・四)

鐘美堂版

新刊天狗百集と題す。

「艷容女舞衣」(二四・二・一・一六)以下、十八卷の書目あり。多分それ丈は出たものなるべ

く、百集の名から見て、もつと大規模な計畫があつたものではないかと思はるゝが、續刊の有無不明。

中村芳松版

「天網嶋」(二五・二) 「源氏烏帽子折」(二五・四) 「壽の門松」(二五・五)

大阪の出版物であつて、續刊の有無不明。表紙の向イ鳳凰丸迄も刻明に武藏屋本を模したのはこの版である。唯武藏屋本は題簽が正しい長方形であるのが、この版は上下に上向きに併行した丸味を持たせ、上部に釘穴を見する小さい丸を描き、右と下の縁に厚味を見せて聯の形になつてゐる丈が異つてゐる。

名作三十六佳撰(金櫻堂版)

明治廿三年から廿六年にかけて、三十六卷、三十七篇を出し、引續き淨瑠璃全書と題して、廿六年から七年頃、三卷、三篇を追加して、三十九卷、四十篇となつてゐる。後、明治四十三年頃、大阪中川玉成堂から「淨瑠璃丸本全書」と改題して、内容はそつくり

其儘で、非常に俗惡な表紙を持つた叢書となつて出てゐるものがある。

斯うした模倣本中には、模倣者流の常とは云へ特にインチキさ加減の甚しいものがある。

溫故堂の「天智天皇」と、鐘美堂の「烏帽子折」と、中村芳松の「天の網嶋」「烏帽子折」とはそつくり武藏屋本のそれぞれの巻を、其儘印刷したものであつて、頁付から、各頁の配字、句點、漢字と假名の使ひ方等寸分の差もない、薰志堂の三本は、體裁から云つて武藏屋模倣本に數へたが、内容は我自刊我書屋の「戯曲近松集」(二十二年一月改版の四六版)を同様に其儘底本にしたもので、特に滑稽なことには、我自刊我本は三篇一卷で、通し頁が付いてゐるのを、薰志堂本は三卷に分け乍ら、そのまま印刷したので、後の二卷は途中からの半端な頁が付けられてゐる。インチキもこゝ迄徹底すれば寧ろ愛嬌がある。試に武藏屋本の方が後に出てゐる「油地獄」を文學材料本に、「天鼓」を文學資料本に比べて見ると、それを種本に用ひなかつた證據もないが、流石にそのまま印刷するやうな無恥な眞似はしてゐない。

中村芳松版三本のうち、「壽の門松」は、これも前年に出た武藏屋本のその篇があるに拘ら

ず、用字、配字が全く異つてゐる。前二本は武藏屋本をそのまま印刷し、表紙の意匠迄剽竊した手法から云つて、この巻に限つて古刻の原板から翻刻するやうな良心的態度がある譯が無いのに、序に目の前にある武藏屋本を種本にしなかつたのは何故であらうか。何れは手近に底本があるのであらうが、筆者の知る限りでは、武藏屋本以外にこの版の前にこの篇が翻刻されたものは無い筈である。中村版の種本が何であるかなどはどうでもいゝことであるが、何等かの見おとした翻刻院本があるのでは無いかといふ意味で、聊か氣になるのである。

斯うした模倣者の間に在つて、文學資料本と文學材料本とが、武藏屋本其他の前出本と、及び相互間の重複を避けて、新しい資料を提供してゐるのは敬意を表すべきである。「三十六佳撰」の篇目は、やまと文範（十四篇）、時代世話劇種本（十篇）新編大和文範（二篇）等の前出本があつて、新に寄與する處は、十三篇のみである如くであるが、それだけでも稱すべき功勞がないとしない。

第三期（帝國文庫發刊）

明治廿六年、博文館の帝國文庫が創刊された。この叢書の正編五十卷（明治二六―三〇）、續編五十卷（明治三一―三六）、合計一百卷は、徳川期文藝の全領域に亘つた厖然たる集大成であつて、その規模の雄大なる、絢爛目を奪ふものがある。徳川文藝復興の波に乗つたから斯の如き大事業は完成されたのではあるが、同時に斯の叢書の出現が、一つの時代を創造したのもあつた。

帝文、續帝文中にある淨瑠璃集は、左記の十一卷、百八十一篇である。

忠臣藏淨瑠璃集（正三八） 一三篇 二九・二・七

近松時代淨瑠璃集（正四二） 三二 二九・八・二〇

淨瑠璃名作集（正四七） 一二 三〇・二・六

近松世話淨瑠璃集（正五〇） 二〇 三一・六・四

- 竹田出雲淨瑠璃集（續 六） 一四篇 三一・六・三〇
- 江戸作者淨瑠璃集（續 九） 一三 三一・八・二八
- 紀海音淨瑠璃集（續一二） 一三三 三二・一・一〇
- 續近松淨瑠璃集（續一三） 二二 三二・二・二〇
- 近松半二淨瑠璃集（續一四） 一四 三二・四・二五
- 並木宗輔淨瑠璃集（續一九） 一四 三三・二・二八
- 文耕堂淨瑠璃集（續二七） 一四 三三・一・一四
- 院本翻刻の第三期は、帝文中の最初の淨瑠璃集「忠臣藏淨瑠璃集」が出た明治廿九年に始まるものとすべきである。第二期の主人公武藏屋本が、この年の一月に退場して、その二月に新時代の主人公が登場してゐるのは、時勢としては偶然ではないが、斯く的確に界を接したのは一奇である。

この時武藏屋本は「賣れることは賣れたが、費用もかゝつたので、結局は損失に畢つた」

と、内田魯庵氏が云つてるやうに、もとく豊富な資力と、周到な用意とを以て爲された仕事でなかつたので、力既に盡きて、さなきだに衰亡の運命に臨んでゐたのであるが、帝文の出現が、その頽勢に拍車をかけ、或は、挽回、再起の機會を奪つて、結局はとゞめを刺したのであつた。斯く武藏屋の事業は晩年振はずして、末路憐むべきものがあるが、大局から見れば、彼に與へられた使命は、帝國文庫が新時代に君臨する迄の、基礎工事をすれば足りたのであつて、この意味に於て、彼は立派にその任務を果したのであつた。

院本活字化の歴史は、更に續いて、次第に學問的な特色を持つ數期の時代を數へ得るのであるが、今はそれに觸れない。筆者の語らんと欲する處は、今は忘れられんとしてゐる武藏屋本と、この意義ある仕事を爲した先覺者^{はや}早矢^{したみち}仕民治に就てゝある。

武藏屋本書目

初 版 書 目

武藏屋本刊行の道程には、例へば、單本が重版の際合卷となり、後再び單本となつてゐる如き、合卷の組合せが數次變つてゐる如き、その他不規則な變遷があつて、直線的に書目の全貌を描くことは出来ない。今日に於て、重版の全部に目を通すことは望めないことであつて、現本を見られないものは、諸卷の後付にある書目によつて補ふ外はないが、その目錄が頗る正鵠を缺く記述を含んでゐるので、實在するや否が明かでない組合せの合卷目、又は單本目が尠くない。目錄にも現はれない全く筆者が知らぬ卷目が存在することも亦無いとは云へない。茲には先づ各篇の初版を拾つて、直系的な書目を擧げて見る。

十四年の三本は、前に記したやうに、在否を疑はるゝ問題の版であると同時に、ありとしても、それは丸善の出版であり、十五年の三本は、「近松著作全書」の改装に過ぎずして、加之、改装本が上市されたのは明治廿二年末と推定さるゝ時期であつて、その刊記に示す日付ではないのであるから、この六卷を書目の冒頭に措くことは妥當でない。しかし乍ら、叢書閣はもと／＼丸善から派生した分身であること、後年の武藏屋本が、それ等の版歴を

踏襲する形式を執つてゐるのを無視することが出来ぬことなどの理由によつて、茲には假りに目録に加へて、狹義に於ける各篇の初版に相當する再版の日付を併記することにする。

- 傾城反魂香 一四・四・一四 (再版二四・四・一四)
百日曾我 一四・一〇・一四 (同 一三・二・四)
戀八卦柱曆 一四・一一・一〇 (同 一三・三・一四)
本朝三國誌 一五・四・二九 (同 二三・五・三〇)
心中重井筒 一五・四・二九 (同 二三・一〇・一一)
姫山姥 一五・四・二九 (同 二三・一〇・一一)
天智天皇 二二・一〇・一
十二段 二二・一一・九
日本振袖始 二三・一二・一三

出世景清 二三・三・二七

關八州繫馬 二三・四・五

吉野都女楠 二三・八・二八

(蟬) 伊達染手綱丸 二三・一〇・四

(最明寺殿百人上藤) 今宮心 中 二三・一・一〇

國性爺合戰 二四・一・二〇

(双生隅田川) 心中宵庚申 二四・二・九

(心中天網嶋) 源氏烏帽子折 二四・三・七

(曾根崎心中) 心中二枚繪双紙 博多小女郎浪枕 二四・三・二五

曾我會稽山 二四・五・一一

近松叢書 第一冊

同 第二冊

雪女五枚羽子板	二四・五・二四	同	第三冊
堀川波の鼓	二四・七・二三	戲曲叢書	第四冊
世繼會我			
夕霧阿波鳴渡	二四・九・一〇	同	第五冊
冥途の飛脚			
鎗權三重帷子	二四・一〇・二一	同	第六冊
壽の門松			
心中又は氷の朔日	二四・一〇・三一	同	第七冊
五十年忌歌念佛			
生玉心中	二四・一一・二九	同	第八冊
女殺油地獄			
卯月の紅葉	二五・一・一八	同	第九冊
薩摩歌			
長町女腹切	二五・一・二九	同	第十冊
淀鯉出世瀧徳			
天神記	二五・三・九	同	第十一冊
傾城酒呑童子	二五・四・一二	同	第十二冊
信州川中嶋合戦	二五・六・八	同	第十三冊

(百合若大臣野守鏡
卯月の潤色)

二五・七・一九

戯曲叢書 第十四冊

(遊君三世相
碁盤太平記)

二五・一・四

同 第十六冊

一心五戒魂

二六・四・一四

同 第十七冊

國性爺後日合戦

二六・九・二一

同 第十八冊

善光寺御堂供養

二七・四・一七

同 第十九冊

(唐船噺今國性爺
右大将鎌倉實記)

二八・三・二一

同 第二十冊

津國女夫池

二八・一〇・二六

同 第二十一冊

(天
傾城吉岡染鼓)

二九・一・一〇

同 第二十二冊

武藏屋本中の近松物は、初版で數へて以上の三十八卷、合卷組合せの變遷はあつても、篇數はこの五十六篇を以て盡くる。

「曾根崎・二枚繪双紙・博多小女郎」の一卷から、「近松叢書」と銘打つて、叢書番號を附するに至つたのは、この時、別働隊として、「新編やまと文範」を續刊し、近松以外の作品を集

める計畫が立つたので、それと併行する意味で、武藏屋本を「近松叢書」としたのである。然るに、「新編やまと文範」は、志が大きかつたのに似ず、僅に一卷を出したのみで、挫折したので、近松以外は再び武藏屋本に挿むより仕方が無くなり、その第四冊目の「堀川波の鼓、心中萬年草、世繼曾我」から、番號はそのまゝ第四冊を襲うて、「戯曲叢書」と改題して、最後に至つた。上卷に叢書第十五冊が脱けてゐるのは、紀海音の「八百屋お七、三世二河白道」の一卷がそこに挿まつてゐるのであつて、そのあとにも「井筒屋源六戀寒晒、男色加茂侍」があるが、これは誤つて「今國性爺、鎌倉實記」と叢書第廿冊の番號を重複した。武藏屋本の非近松物に就ては後に述べる。

重 版

重版の全部を知ることの困難であることは前述の如くである。茲には筆者の寓目した確實なるものと、後版の刊記により確實と認めらるゝものゝみを擧げて、後考を俟つ。

武藏屋本には、誤つて他の巻の奥付を付せられてゐるものが多く、稀には奥付を缺くものもある。これ等は多く版歴から除かれて無籍本となつてゐるので、發行日付の推定さるゝものは、その順位により、一次版、二次版と名づけて、刊記に明記せる初版、再版と區分する。同版に甲、乙等があるのは、同版の名で二度以上版行したものがあつたらしく、装幀が異つてゐるものがあるのである。奥付誤付本、同版異装本等に就ては、後に解説することゝして、茲には簡單にその書目を擧げる。

装幀の「地」は表紙の地色、「紋」は向イ鳳凰丸の紋様、「字」は題簽の文字、「簽」はその題簽の色である。特に記さぬものは、紋様と題簽とは白抜、題字は黒色である。

合巻で最後迄組合せが同一である場合は、合巻としての版歴を掲げ、途中で組合せが變遷してゐるものは、篇別に記載して、版毎に相手方の篇名を括弧して示す。

傾城反魂香

初版 一四・四・一四

疑問本

再版 二四・四・一四 (地)薄緑

三版 二六・一・一二 (同)薄紫

百日會我

初版 一四・一〇・一四 疑問本

再版 二三・二・四 (地)灰色

三版 二三・五・五 (同)同

四版 二四・三・一七 (同)焦茶

五版 二五・四・二三 (同)薄黄藤(字)甲黑、乙赤

二七・四の書目に「六版近刊」とあり。

戀八卦柱曆

初版 一四・一・一〇 疑問本

再版 二三・三・一四 (地)萌黄(字)赤

三版 一三・一一・二一 (地)薄緑(字)赤

四版 二四・四・一〇 (同)同 (同)同

五版 二五・三・五 (同)同 (同)同

六版 二五・一一・二五 (同)同

重井筒

初版 一五・四・二九 (地)改装本、題簽貼付、稍小形

再版(姬山姥) 二三・一〇・一一 (同)焦茶

三版(姬山姥) 二四・二・? (同)肉色

四版(伊達染) 二五・二・二四 (同)同

五版(伊達染) 二五・八・一九 (同)同

六版(伊達染) 二八・一〇・二〇 (同)萌黄

姬山姥

初版 一五・四・二九 (地)改裝本

再版(重井筒) 二三・一〇・一一 (同)焦茶

三版(重井筒) 二四・二・?

四版(單) 二七・三・七 (同)淺黃

本朝三國誌

初版 一五・四・二九 (地)改裝本

再版 二三・五・三〇 (同)萌黃

三版 二四・三・一三 (同)同

四版 二五・四・一九 (同)卵黃

五版 二七・三・三一 (同)同、(簽)黑(字)白

天智天皇

初版 二三・一〇・一 (地)淺黃

再版 一三・一・一五

(地)淡納戸

三版 二三・五・一五

(同)同

四版 二四・四・二三

(同)灰色

五版 二九・二・二五

(同)灰色(紋)白(簽)白(字)黑、

十二段

初版 二二・一・一九

(地)黃

再版 二三・一・二七

(同)同

三版 二三・六・二〇

(同)同(簽)黑(字)白

四版 二三・一・二九

(同)同

五版 二四・六・二五

(同)甲黃、乙青(簽)甲白、乙赤(字)甲黑、乙白

日本振袖始

初版 二二・二・一三

(地)薄桃色

再版(振袖始) 二三・八・二五

(地)黄

三版 二五・九・一六

(同)焦茶

第四次本 二七・二・二九

(同)黄色、隅田川再版奥付誤付

四版 二八・一〇・八

甲、濃褐色、
(同)乙、淡チヨコレート色、
但文字別筆

出世景清

初版 二三・三・二七

(地)淺黄

再版 二三・一一・一五

(同)萌黄

三版 二四・三・六

(同)同

四版 二四・七・二

(同)同

五版 二五・四・一九

(同)甲、水色(字)黒
乙、同(字)赤

六版 二九・二・二三

(同)薄茶、第五版とあり、三、四版の日付も誤

關八州繫馬

初版 二三・四・五

(地)薄茶

再版 二四・一・二

(同)同

三版 二五・一・二六

(同)橙色

四版 二七・三・二二

(同)水色、再、三版を抜かして、再版とあり

吉野都女楠

初版 二三・八・二八

(地)淺黄

再版 二四・六・一七

(同)同

三版 二九・二・二七

(同)鶯色

三版奥付に、再版印刷二四・一・六、發行二四・一・八とあり、現本と異なる。現本を信ずる外なし。

伊達染手綱

初版 (蟬丸) 一三・一〇・四

(地)肉色

再版 (蟬丸) 二四・三・三

(同)同

三版 (重井筒) 二五・二・二四

(同)焦茶

四版 (重井筒) 二五・八・一九

(同)肉色

五版 (重井筒) 二八・一〇・二〇

(同)萌黃

蟬丸

初版 (伊達染) 二三・一〇・四

(地)肉色

再版 (伊達染) 二四・三・三

(同)同

三版 (烏帽子折) 二五・九・二

(同)?

今宮心中

初版 (最明寺) 二三・一一・二〇

(地)鶯色

再版 (最明寺) 二四・五・一一

(同)薄淺黃

三版 (最明寺) 二五・四・二〇

(地) 淺黃(字) 赤

第四次版 (潤色) 二五・七・?

(同) 同、奥付缺、附記文の日付による、
表紙には今宮心中の題目のみあり、
貼付本

第五次版 (潤色) 二八・一〇・二五

(同) 同、再、三版を脱して、再版とあり

最明寺殿百人上臈

初版 (今宮) 二三・一一・一〇

(地) 鶯色

再版 (今宮) 二四・五・一一

(同) 薄淺黃

三版 (今宮) 二五・四・二〇

(同) 淺黃(字) 赤

四版 (單本) 二六・三・八

(同) 甲濃黃題簽貼付本、乙薄黃同

國性爺合戰

初版 二四・一・二〇 (地) 薄茶

再版 二四・一〇・一五 (同) 同

第三次版 一七・二・九

(地)水色、「隅田川」再奥付誤付

第四次版 二七・四・二一

(同)淡緑、「酒吞童子」再奥付誤付

双生隅田川

初版 (宵庚申) 一四・二・九

(地)白(簽)黒(字)白

再版 (單本) 二七・二・九

(同)甲緑、乙黄

心中宵庚申

初版 (隅田川) 一四・二・九

(地)白(簽)黒(字)白

再版 (天網嶋) 一五・三・一三

(同)薄黄

三版 (天網嶋) 一六・三・?

「善光寺」後付による

心中天網嶋

初版 (烏帽子折) 一四・三・七

(地)草色

再版 (宵庚申) 一五・三・一三

(同)薄黄

三 版 (宵庚申) 二六・三・?

「善光寺」後付による

源氏烏帽子折

初 版 (天網嶋) 二四・三・七

(地) 萌黄

再 版 (蟬丸) 二五・九・二

(同) 黄

曾根崎 心中

心中二枚繪双紙

博多小女郎浪枕

初 版 二四・三・二五

(地) 茶

再 版 二五・三・一五

(同) 萌黄

三 版 二五・九・二六

(同) 同、「紅葉、薩摩歌」及び「川中嶋」に誤付の奥付による

第四次版 二七・四・二一

(同) 同、「酒吞童子」再、奥付誤付

曾我會稽山

初版 二四・五・一一 (地)薄桃色

再版 二六・四・一五 (同)萌黄

三版 二八・三・一五 (同)白(簽)二重枠にて圍ふ

雪女五枚羽子板

初版 二四・五・一五 (地)薄水色

第二次版 二七・二・? (同)白、「隅田川」再、奥付誤付

第三次版 二八・一・二九 (同)同、善光寺再、奥付誤付、貼付本

再版 二九・二・二五 (同)薄橙色

堀川波の鼓

心中萬年草

初版 (世繼曾我) 二四・七・一三 (地)灰色

再版 二五・八・五 (同)薄水色

第三次版

二五・二〇・?

(地)薄水色、「紅葉、薩摩歌」再、奥付誤付

世繼會我

初版 (堀川、萬年草)

二四・七・一三

(地)灰色

諸卷の後付に、この篇の單本目頻出するも、在否明かならず。

合本「近松時代淨瑠璃」第三、四卷(共に二九・二・二六)、「吉野都女楠」第三版(二九・二・

二七)の後付書目に「世繼會我、金平法門諍」の合卷目がある。

冥途の飛脚

夕霧阿波鳴渡

初版 二四・九・一〇

(地)薄桃色

再版 二五・四・二七

(同)鼠色

三版 二六・八・二二

(同)淡褐色、國性爺後日初版(二次本)奥付誤付

鎗權三重帷子

壽の門松

初版 二四・一〇・二一

(地)薄茶

再版 二五・一〇・?

「善光寺」後付による

心中又は氷の朔日

五十年忌歌念佛

初版 二四・一〇・三一

(地)灰色甲、乙、貼付本

再版 二五・四・二八

(同)三版奥付刊記による

第三次本 二七・二・八

(同)桃色、國性爺三次本の誤付

三版 二八・一〇・三二

(同)茶色

生玉心中

女殺油地獄

初版 二四・一一・二九

(地)薄水色

再版 二五・一〇・二九

(地) 綠

卯月の紅葉

薩摩歌

初版 二五・一・二八

(地) 藤茶

第二次版 二五・九・?

(同) 黃、「曾根崎外二」三版奥付誤付

再版 二五・一〇・三

(同) 水色

第四次版 二八・一一・?

(同) 橙色、「善光寺」再、奥付誤付、貼付本

長町女腹切

淀鯉出世瀧徳

初版 二五・一・二九

(地) 甲、淡卵黃
乙、淡水色

第二次版 二五・八・?

(同) 淡卵黃、「伊達染四、重井筒五」奥付誤付

再版 二五・一一・一〇

(同) 薄茶

天神記

初版 二五・三・九

(地)緑

再版 二八・一・二九

(同)白、貼付本

傾城酒吞童子

初版 二五・四・二二

(地) { 甲、灰色
乙、水色
丙、同 }

再版 二七・四・二一

(紋)赤(簽)白(黒の二重枠)

信州川中嶋合戦

初版 二五・六・八

(地)甲緑茶、乙薄茶

第二次版 二五・九・?

(同)淺黄、「曾根崎外二」三版奥付誤付、貼付本

第三次版 二五・一・一〇

(同)黄、「女腹切、淀鯉」再版、奥付誤付、貼付本

再版 二八・一〇・二七

(同)萌黄

百合若大臣野守鏡

初版 (潤色) 二五・七・一九

(地)灰色(簽)甲黑粹(紋)甲乙黒、丙丁戌白

第二次版 (潤色) 二五・一・?

(同)灰色、「女腹切、淀鯉」再版奥付誤付

五種の初版、異本あり最も珍

卯月の潤色

初版 (百合若) 二五・七・一九

(地)灰色、四種の異本あり、「百合若」初版参照

第二次版(今宮第一次本四次) 二五・七・?

(同)同、表紙には「今宮」のみの題名あり、奥付缺

第三次版(百合若) 二五・一・?

(同)同、奥付誤付本

再版 (今宮五次) 二八・一〇・二九

(同)同

遊君三世相

碁盤太平記

初版 二五・一・四

(地)卵黄

一心五戒魂

初版 二六・四・一四

(地)薄緑

再版 二九・二・二二

(同)薄黄

國性爺後日合戰

第一次版 二六・八・?

(地)白、(簽)二重粹、奥付誤付、

初版 二六・九・二一

(同)赤茶(同)白拔、

第三次版 二七・二・?

(同)白、(同)二重粹、奥付誤付、

第四次版 二七・四・?

(同)白、(同)「善光寺」初

再版 二八・一〇・二七

(同)白、(同)二重粹

善光寺御堂供養

初版 二七・四・一七

(地)薄桃色

再版 二八・一一・二九

(同)薄淺黄、貼付本

唐船嘶今國性爺

右大將鎌倉實記

初版 二八・三・二一

(地)白(簽)二重粹

津國女夫池

初版 二八・一〇・二六

(地)水色(紋)白(簽)白(字)赤

天鼓

傾城吉岡染

初版 二九・一・一〇

(地)甲、白(簽)二重粹(紋)綠
乙、貼付本(地)薄黃(粹)金(紋)金
(地)灰色(粹)銀(紋)銀

重版は上記の外にも、いくらかあるであらうと思はるゝが、變つた組合せの合卷、又は單本は、「世繼曾我・金平法問諍」及び「百合若大臣野守鏡」の二種があるのみであらう。

武藏屋本の合本

合卷とは別に、同じ武藏屋で發行した合本六卷がある。これは別に印刷したものではなく、既刊の各篇を合綴した丈のものであつて、合卷本もさうであるが、各篇はそれ／＼獨立した頁付を持つてゐる。假綴の紙表紙は、矢張り向イ鳳凰丸散らしの武藏屋本装釘である。表紙は少しく黄味を帯びたる白色、紋様は茶色、同じ色の粹を取つて、題字を書いてあること六卷概ね同じである。

近松世話淨瑠璃

自 寶永七年
至 享保七年

發行 二五・一・二

今宮心中、心中又は水の朝日、夕霧阿波鳴渡、冥途の飛脚、生玉心中、鎗權三重帷子、壽の門松、博多小女郎浪枕、心中天網嶋、女殺油地獄、心中宵庚申。(十一篇)

近松世話淨瑠璃

自 元祿十三年
至 寶永五年

發行 二五・四・八

長町女腹切、淀鯉出世瀧徳、會根崎心中、薩摩歌、重井筒、五十年忌歌念佛、心中
二枚繪双紙、戀八卦柱曆、堀川波の鼓、卯月の紅葉、卯月の潤色、伊達染手綱、心
中萬年草。
(十三篇)

この巻には、巻頭に内田不知庵の長文の近松の藝術を論じたる序文を掲げ、古版の「氷の
朔日」の巻頭繪入の二頁を、原寸大の石版にしたものを口繪として挿んである。

近松時代淨瑠璃(一)

(自正徳五年十一月、至享保四年二月)

發行 二七・四・二四

國性爺合戦、國性爺後日合戦、日本振袖始、曾我會稽山、傾城酒吞童子、善光寺御
堂供養、本朝三國誌。
(七篇)

近松時代淨瑠璃 (二)

(自享保五年八月、至同九年十一月)

發行 二八・一一・二二一

双生隅田川、津國女夫池、信州川中嶋合戰、唐船嘶今國性爺、關八州繫馬、右大將
鎌倉實記。 (六篇)

近松時代淨瑠璃 (三)

(正德五年八月以前)

發行 二九・二・二六

世繼會我、金平法門諍、出世景清、遊君三世相、天智天皇、十二段、百日會我、源
氏烏帽子折、蟬丸、一心五戒魂、最明寺殿百人上臈。 (十一篇)

近松時代淨瑠璃 (四)

發行 二九・二・二六

雪女五枚羽子板、傾城反魂香、碁盤太平記、天鼓、百合若大臣野守鏡、吉野都女楠

以上世話二卷廿四篇、時代四卷卅三篇、計六卷五十七篇である。この内時代第三卷の「金平法門評」は、「新編大和文範」から抽いて来たもので、これを除いた五十六篇は、近松ものの武藏屋で翻刻した全部である。即ち既刊の全部が、最終期に、六卷に纏められたのである。

話二卷には、表紙及び背の題名の下に、年號、年數を記してあるが、時代四卷には、題名を記すのみで、四卷の見分けがつかぬ形式になつてゐる。

合本は初版限りで、重版さるゝに至らなかつた如くである。世話、時代ともに、帯背灰色、題箋の枠と紋様とに銀色を用ひた表紙があつて、世話の「元祿、寶永」とある分は廿五、六年、「寶永、享保」は廿七、八年、時代の分は廿八、九年頃に出た諸篇に、題箋を貼付けて流用されてゐるのを散見する。合本の再版を出さうとして果さず、表紙が不用になつたのであらう。

近松以外の武藏屋本

武藏屋で翻刻した近松以外の院本には左記の數種がある。

大塔宮曦鎧 竹田出雲・松田和吉作、近松門左衛門添刪

初 版 二三・一一・一六 卵黄色、下部に七寶散らし

再 版 二四・二・二五 同前

第三次版 (浮名額)二六・三・? 灰色、紋様及題簽粹銀、貼付、誤付

この第三次版には「金屋金五郎浮名額」(紀海音)が突如添付されてゐるが、奥付は「最明寺」四版の分が誤付されてゐるので、正確な刊期は分らぬ。この巻の後付には「太平記曦鎧、全一冊、三版近刻」とあるなど、題簽貼付本であり、奥付誤付本であること、共に混亂のあとが見ゆる。近松以外の武藏屋本で重版されたのは、恐らくこの篇だけであると思はるゝ。

心中ニツ腹帯 紀海音

末廣十二段 同

發行 二四・二・一三

表紙は同じ卵黄色。七寶散し。これが先づ近松以外の院本物のユニフォームであつた。

八百屋お七 紀海音

三世一河白道 作者不明

發行 二五・九・一一

表紙薄蒔黄地に七寶散し。この巻より表紙の題目に「戯曲叢書」と頭書し、奥付に叢書第十五冊と記してある。「新編大和文範」の刊行が、第一冊限りで中止され、近松以外物を近松物に挿む準備として、「近松叢書」を「戯曲叢書」と改題した後の最初の非近松もので、改題後一年餘を経て初めて現はれたものである。

井筒屋源六戀寒晒 西澤一風

男色加茂侍 錦文流

發行 二七・六・二一

表紙淺黃地に七寶散し

戯曲叢書第二十冊の番號を「唐船噺今國性爺、右大將鎌倉實記」と重複した。

新編大和文範 第一冊 四六版、假綴

發行 二四・五・一九

御所櫻堀河夜討 文耕堂、松洛

新版歌祭文 半二

鎌倉三代記 海音

男作五雁金 出雲

仁徳天皇萬年車 錦文流

金平法門評 作者不明

六〇

武藏屋と富貴館（中嶋精一、京橋區南大工町十一番地）との合同出版であつて、武藏屋本の別働隊と目すべきものである。卷頭の例言によれば、この叢書刊行の計畫は、毎月一回十二回を一期とし、海音、出雲以下、貞享、元祿より、天明、寛政の新しいもの迄六十餘篇を出し、更に第二期以下をも續刊して、近松叢書と併行して曾て刊行流布された、「院本數百卷」を網羅しようとする大規模なものであつたが、事志と違つて、僅にこの第一冊を出したのみで已んだ。

この卷の劈頭には「新編大和文範發行の趣意」と題した九頁に亘る論文があつて、狂言作者が俳優の掣肘によつて作品を支配されたのに對し、淨瑠璃作者は比較的自由な立場に在つて筆を執つたこと、淨瑠璃が妄誕不稽の語を爲すとの批難に對して、院本は歴史に非ずとする辯駁、風俗好尚を異にする歐米直譯の演劇改良論に對する論難など、堂々たるものがある。「發行者識」とあるのみで、筆者は明かで無いが、恐らく魯庵、篁村等の、武藏屋

應援團の一人の筆に爲るのであらう。

以上、近松以外の院本翻刻の跡を瞥見すると、武藏屋主人の院本癖は、近松物翻刻の事業が進捗すると共に、近松以外への進出を企圖するに至り、廿三年十一月、先づ「大塔宮囃鎧」の一篇を出したが、その装幀を近松物に一貫した向イ鳳凰丸散しから離れて、七寶散しの別箇の意匠を創めて、以下之を近松以外物に慣用したことが、この方面への繼續的な意圖があつたことを示してゐる。次で廿四年二月、第二本「心中二ツ腹帯、末廣十二段」を出した時、やりかゝつて見れば量に於て近松物に幾倍するこの廣汎な領土に手をつけるには、資力の不足が憂へられたので、出資者富貴館を求めて、共同出版によつてこの方面へ乗り出さうとして、こゝに「新編大和文範」の大計畫が成つた。恰も近松物の刊行が最も油の乗つた時期であるので、早矢仕民治のこの事業に對する意氣天を衝いて、この計畫となつたものであつて、武藏屋は事業擔任者であり、富貴館は出資者の立場であつたのであらう。不幸にして採算が思はしくなかつたか、或は何等かの意見の扞格を生じたかによつて「新編大和文範」の

計畫は、その第一歩を踏み出したのみで夭折し、武藏屋は、再びその貧弱な獨力に歸るより仕方がなかつた。もと／＼力に餘る仕事であつたからの共同經營計畫であつたので、この出版の蹉跌は、近松以外への發展の素志を挫折せしめた。豊富な資金の援助があつて、縦横に民治の事業慾を満足せしむることが出来なかつたのは、返す返すも遺憾であつた。かくてこの方面の仕事は退嬰的となつて、二十五年九月「八百屋お七、三世二河白道」を、二十七年六月「戀寒晒、加茂侍」を出したのみで、近松物と共倒れになつて已んだのであつた。

「戀寒晒、加茂侍」の後付に、「新編大和文範」第一冊、「再版中」といふ記述があるが、筆者はまだその現本を寓目しない。恐らく實現するに至らなかつたのであらう。

院本ではないが、武藏屋の出版物中に、左記の注目すべきものがある。

- | | | | |
|--------|-------|----------|-------------|
| 好色五人女 | 井原西鶴 | 二三・二二・一六 | (二四・一・一二再版) |
| 好色一代男 | 同 | 二四・一・二七 | (二四・四・二一同) |
| 傾城買二筋道 | 梅暮里谷峨 | 二四・六・一〇 | |

「五人女」と「一代男」とは、これも近松と並んで數へ切れぬ程の版種の西鶴翻刻の嚆矢である。

早矢仕民治

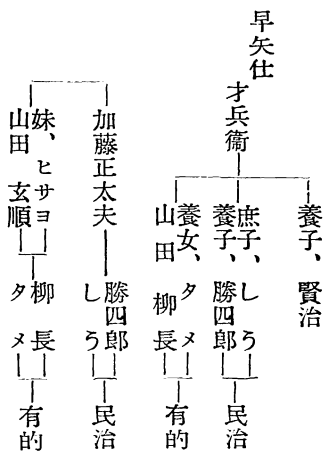
武藏屋本の發行者早矢仕民治は、安政四年九月、美濃國武儀郡笹賀村に生れた。笹賀村の庄屋早矢仕才兵衛は、大桑村の神主加藤正太夫の次男勝四郎を容れて養子とし、妾腹の子しうを娶はせて分家せしめた。民治はその次男に生れたのであつた。

武藏屋の母體たる丸善書店の創始者、早矢仕有的ゆうてきと民治との續き合ひは、二者の事業上に主従の關係があるから、詳記することを要する。有的は同村の醫師、山田柳長の子であつて、母タメは關町魚山五平（辰巳屋）の女であるが、どうした譯であるか、才兵衛の養女になつて、柳長に嫁したのであつた。柳長は有的が生るゝに先立つて夭折したので、タメは養家に歸つて、後の有的である右京を生んだ。才兵衛は孫に當る右京を可愛がること一通りでな

く、常に自分で抱いて寝て、面白い話をして聴かしたといふ。斯くて右京の有的は、亡父の業を繼いで醫術を修め、後に獨立した時は、當然山田姓を名乗るべきであつたが、生るゝ時から早矢仕の家で育ち、才兵衛から云へば孫とは云へ、手鹽にかけた子のやうな、離しもない情緒があつたのと、今一つには、早矢仕氏は一郷に通つた名家であるので、その名を名乗ることは、醫業を開く上に有利であるので、才兵衛が勧めて、早矢仕を名乗らせたのであつた。一説によれば、有的は才兵衛の養子になつたといふが、これは情義に於て二者は親子であつたといふに止まり、正式に養子になつた譯ではない。

即ち、有的の母タメが才兵衛の養女であつた點から云つて、有的と民治とは從兄弟に當るわけで、その方の關係では血縁は無いやうに見ゆるが、別に、柳長の母（山田玄順の妻）ヒサヨは、勝四郎の實父加藤正太夫の妹であるので、この方の關係から、有的と民治とは血の續いた再從兄弟になる譯である。表面の續き合ひは上記の如くであるが、實際上の家族としての付合は、有的が才兵衛の子供分とされてゐたことやら、年齢上の關係もあつて、二者は

叔父、甥といふことになつてゐた如くである。



有的が上京して醫業を開き、次で横濱に移つて、診療所、丸善藥局、丸善書店等の事業に手を擴ぐるに及んで、早矢仕の一族が、一人又一人、郷里から出て來てこれを助けた。民治もその一人であつて、當時横濱の堺町に在つた丸屋善八店に入つて、ブックマンとしての第一歩を踏み出したのが、明治五年五月廿一日、民治十五歳の時であつた。

後年有的の死後、民治が編纂した「早矢仕有的年譜」が早矢仕家に遺つてゐる。美濃版の野紙を綴つたものに、断片的な資料なり、記憶なりを、雑然と書き列ねたもので、年譜としての整うた體系を持つてゐるものとは云へないが、貴重な資料の集積である。その中から民治入店當時の丸屋善八店の状況を語る二三の記述を拾つて見る。

此頃堺町ニ、書店ト藥店軒ヲ連ネ、隣家ニ靜々舎ト稱スル診察所アリ。木下弘、木下詢（若木ト呼タリ、コレ弘氏ノ弟ニテ、兩氏ヲ間違ヘタル爲メト聞ケリ）、浦井宗和、千葉繁齋（此人ハ山東直砥氏ノ關係アル人カ、造化機論ハ千葉氏ノ翻譯署名ナリシガ、實ハ山東直砥氏ノ譯ト聞タリ）ノ諸氏ニシテ、徳永周亭氏ハ眼病ニテ、藥店ノ二階ニ臥床シ居タリ、眼病ハ梅毒病院ニテ病人ノ痲毒ヲ感染セルナリト、浦井宗和氏ハ痲毒病院へ出勤シ居ラレタリ、木下詢氏ハ尾上町高嶋ノ長屋ニ開業、千葉氏ハ十全病院カへ出勤セラル。斯ノ如クシテ何レモ傍ラ病家ヲ持テ藥ハ丸屋ノ藥局ニテ調査スル様處方箋ヲ渡スコト、ナリ居テ、藥店ノ

方ハ午前中ハ隨分繁忙ナリシ。

此年頃松本孝助ト云フ洋服姿ノハイカラ紳士先生ヲ尋ネテ東京ヨリ時々來濱セリ。此ハ活版業ニシテ、ローマ字綴リノ英和通信、又ハ平文辭書^{ハボ}ノ和漢ノ部文ケヲ小本ニ印刷（後ニ發賣禁止セラル）シ、其實捌ヲ店ヘ托セラル、或ハ送本ノ包紙ニローマ字綴ノいろハ印刷セルアリ、民治是ヲ見出シ、裏打ヲシテ大事ニ保存シ、之ヲ暗唱シツ、アリシニ、清水勝之之ヲ奪ヒ取りタリ、依テ勝之ト組合テ喧嘩ヲナシタルニ、先生聞咎メラレテ大ニ譴責シ、理非ヲ正サレ、印刷物ハ民治ニ戻リタルガ、之ハ西洋活版ニテローマ字ニテいろハヲ書キ、假名ヲ附シアリテ、店ニテ初メテローマ字ヲ學ブコトヲ得タリ、當時ハ他ニ類似モノナカリシト覺ユ。

洋書ノ外題ハ我々小僧ハ未ダ覺エラレヌ故、定價ガ一枚板ニ記シアリ、例ヘバウエラント修身書大、ウエラント經濟書小ト云フ如ク翻譯シテ書付テアリ、是又ヲ記憶シテモ書物ニハ英語ノミデ容易ニ覺エ難キニヨリ、ウエラント修身書ハ外題ガ三行ニ書イテアルトカ、

經濟書ハ四行ニ書イテアルトカ云フ如クニシテ記憶シ、毎夕金澤廉吉等ガ子供ヲ寄セテ、誰ハ何書ヲ出セ誰ハ何書ヲ持ツテ來レト云フ風ニシテ覺エサセシナリ。

明治元年十一月、横濱新濱町の有的の自宅で創められて後堺町に移つたその頃の丸善書店の狀況が目睹さるゝ様で、興味があると同時に、當時の民治の生活をも知ることが出来る。

「年譜」には、明治九年「民治書面ヲ持チテ慶應義塾ニ犬養毅氏ニ使ス」だの、十一年「民治浦賀ニ出張中ノ海軍大尉中村清三郎氏ヘ行キタリ」等の、民治に關する記事を散見する。

明治十二年六月十三日、民治は今の丸善の場所たる東京日本橋の丸屋善七店へ轉勤した。

この時民治廿二歳である。その前から税關關係の事務は民治の擔當する處で、東京に轉じた後も、荷が着く毎に、横濱へ出掛けて處理してゐたが、餘り度々横濱へ行くと云つて、小言を喰つたりしたことがあつた。十三年になると民治は洋書目録の編纂に従事した。この年丸善を中心として、松井忠兵衛、清水卯三郎、西宮松之助、伊藤徳太郎、鹽嶋一介等で洋書

刻組合が組織され、民治は事實上の組合の主任格となつた。最初に出したのはウェブスターのスペルリングで、之が當つて賣口がよく、續いてウイルソン第二リーダー、ピネオ文典、ウイルソンのプライマー等に着手した。民治が一人前の書物人として、漸く活躍するに至つた進境が見ゆる。

明治十四年九月、神田表神保町に中西屋書店が創められた。丸善連鎖店の一つであつて、本來なら丸善神田支店といふべきものであるが、これはその前年に、丸善の洋書部から、奥帳場へ引移した汚損本があつたのを處分することゝ、今一つは、この頃不用になつた洋書を買つてくれぬかといふ申込がぼつ／＼あるので、これは洋書の古本の商賣が成立つと、目星がついたことゝが開店の動機であるが、丸善の名で古本屋でもあるまいといふ處から、別働隊として出來上つたのが、この店であつた。關根痴堂氏につけて貰つたと云ふこの店の別號「掃葉軒」といふのは、滞貨を一掃する機關だといふ寓意であらう。しかしこの店では新本をも取扱はぬではなかつた。明治十七年頃、民治は一時この店の仕事を兼務した。日本橋店

に於けるこの頃の民治は、藏版部（和書取次販賣部）の助役をしてゐたのであつた。

明治十六年四月、後に武藏屋となつた叢書閣が、矢張り丸善連鎖店の一つとして、京橋南傳馬町一丁目十番地に設けられた。これは従來日本橋店で扱つて來た書籍の委託販賣を、獨立して擴張することが一半の目的であつて、左の様な書面が出版業者に配付されてゐる。

益々御清榮奉恐賀候陳者今般別冊規則書ノ如キ一店ヲ設ケ各家御藏版書類賣弘ヲ專業ニ致候間御尊家御藏版ノ書類ヲ見本トシテ御預ケ被下候ハ、大幸ノ至ニ奉存候此段伏テ奉

懇願候 頓首

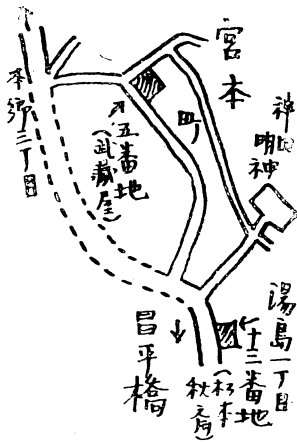
扱 人 太田武之助

負擔人 丸屋善七

扱人太田武之助は、後に民治が選まるゝ迄の叢書閣最初の支配人であつて、負擔人丸屋善七とあるのは、丸善が貸借の責任を負ふ謂である。しかし乍ら、中西屋の洋書に對して、これも丸善の名ではやれない日本物の古本を賣買することが、開店の寧ろ主なる目的であつた

やうである。三村清三郎氏の「本の話」の中に「この民治一と風變りたる人にて、丸善を出て、神田宮本町にて武藏屋といへる古本屋を開き」、後古本屋も失敗して末路は氣の毒なる様なりし」と書いてある。後にはいろいろの出版にも手をつけた。

明治十八年二月廿五日を以て、民治は叢書閣の支配人になつた。廿八歳の時である。この民治の叢書閣入が、後にこの店を獨立して、武藏屋の別名によつて、武藏屋本を刊行するに至る機縁を作つたのであつた。この時から民治は南傳馬町の叢書閣の一室に起臥してゐた。



明治十九年七月、神田宮本町五番地に住居した。これが後に武藏屋本の發行所となつた記念すべき場所であつて、三村氏の「本の話」に「もと聖堂の尻、出ばりて明神前にて一とくねり、曲りたる道ありき。其突當りにこの古本屋ありしと覺ゆ」とあるのがそれである。(上圖の點線の部分は、後に

出來た現在の電車で、當時は武藏屋が面してゐる弓なりの道が本通りであつた。湯嶋一丁目十三番地は、武藏屋本の印刷所、松本秋齋の位置である。

明治廿一年四月廿三日、叢書閣がその宮本町五番地の、民治の住居に移轉してゐる。叢書閣が丸善の連鎖店から獨立して、民治の個人經營に移つたのは多分この時であつて、同時に南傳馬町の店をたゞんだのであらう。

叢書閣獨立の経緯は、内田魯庵氏などによると、「その後丸善をよして、湯嶋天神下に本屋を出した」ことになつてゐるが、これは詳しく云へば、民治の方から丸善を辭職したといふのではなしにこの時有的の仕事が手を擴げ過ぎて始末におへなくなり、それに明治十七年の丸屋銀行の破綻の打撃なども加はつて、事業整理の必要に迫られたので、叢書閣は民治の仕事にしろといふことになつたのである。

民治の經營に移つて以後の叢書閣は、引續き古本屋をやり、新書の取次販賣をやり乍ら、ぼつぼつ出版をやつてゐた。廿二年から近松物の翻刻即ち武藏屋本の發行に取りかゝつたこ

とは前に述べた如くであるが、武藏屋といふ別號は、院本出版の爲の店名であつたと云ふ。色々な仕事の中で、院本翻刻の仕事は、最もその力を用ひたものであつて、別格に取扱はれたことが窺はるゝ。

獨立後の叢書閣經營の歴史は、武藏屋本刊行の盛衰によつて、代表さるゝこと前述の如くであつて、廿三年から廿五年頃迄が最盛期であり、廿六年頃から下り坂となつて、廿九年に至つて没落した。武藏屋本終刊後、間もなく店をたゞんで、書籍業組合の書記になつたが、この時妻は已に死歿し、四男二女はそれ／＼獨立し、嫁いだあとであつたので、民治は組合の事務所に起臥して、わびしい男やもめの生活をしてゐた。この生活は、口癖のやうにやめたいやめたいと云ひ乍ら、永い間續いて最後に至つた。死んだのは大正十一年で、享年六十五歳であつた。その墓は小石川區金富町の多福院にある。

民治の性行に就いては、魯庵氏の談中、「根が癩癩持の逆上屋であつたから、功勞はあつても見落さるゝと云ふ種類の中に這入つて仕舞つた」と、好意を持つてゐるが故に、氣兼ね無

い、思ひ切つた言葉を以て罵倒したと讀まるゝ批評をしてゐるのがある。民治に親炙して、相當面倒を見てやつた魯庵氏の話であり、その話の續きに、「博文館が近松全集（帝國文庫を云ふ）を出した時、原本が武藏屋以外に無いと思はれるのが載つてゐる。早矢仕は博文館と自分の本とを比較した。武藏屋本の誤つた箇所はそのまゝ誤つてゐた。早矢仕は憤慨して、版權侵害の訴訟を起すと云ふのを、漸く宥めて止めさせた」とあるやうなことを思ひ合はせて、首肯るゝものがある。前に記した三村氏の「本の話」にも「この民治一と風變りたる人にて」とあるので、これ丈で民治の性格を想像すると、如何にも偏屈な、輕佻な人とばかり見ゆるが、そうした一面がある迄も、民治は、むしろ人ざわりのいゝ、如才ない、商賣人肌の人であつたやうである。

民治は一面に於て凝り性で、綿密であつて、他の半面に於ては、頗る疎懶で、非事務的、非整理的な處があつた。凝り性であつたことは、武藏屋本刊行に當つて、困難を冒して底本を探求して已まなかつた努力のあとを見ても判ることであるが、矢張り武藏屋で發行した「い

ろは引電信暗號」といふのがあつて、その面倒臭い、細かい仕事を、人手を借りずに、こつこつ獨りでやつたといふことや、例の「早矢仕有的年譜」を編んだことなどから知ることが出来る。

几帳面で無かつたことは、亦武藏屋本を繙くと、隨處にその跡を見出すことが出来る。諸卷の後付の書目が粗漏で、合卷の組合せの記載が正確でなかつたり、發行の日付が違つて居たり、叢書番號が重複したり、就中著しいのは、他の卷の奥付を誤つて付けられてゐる版で、筆者が寓目した丈で十數卷に及んでゐるがある。「有的年譜」の明治十八年の記事に「叢書閣に於て、丸善書店より豫て委託販賣を受けゐたる勘定につき、其殘品を明細に取調ぶることを爲さず、精算を爲さんと申出で、小柳津氏より民治を譴責せらる」と、自ら記してゐる如き、面目躍如たるものがある。

筆者が、有的の嗣子早矢仕四郎翁につき、上記の魯庵氏の説や、武藏屋本の奥付、後付の粗漏を指摘して、民治の性格は、非事務的な變人であつたかと問うたのに對して、翁は「一

面に於ては綿密で、他の半面には正しくすばらな處がありました。部分々々の細かい處には凝り性で、大きな處には抜けてゐる處があつたとしても云ふのでせうか」と答へられた。如何にもその通りであつたのであらう。

武藏屋本創刊

丸屋善七店の刊行にかゝる「近松著作全書」二卷、六篇（明治十四・五年）と、「やまと文範」五卷、二十篇（明治十四年より十六年）とは、何人の手により、如何なる徑路から出版されたかは明かでない。前者は「編輯兼發行人、丸屋善七」とのみあつて、實際の手を下した人の名が無く、後者の奥付には、「編輯出版人」として、東京府士族、小野田孝吾の名があるが、それはどうした人であるか、丸善との關係がどうであつたかに就き、筆者は知る處は無い。「全書」の一、二卷には醉多道士、杉園主人の「文範」の一、二、三卷には、夫れ夫れ藤田茂吉、依田學海、假名垣魯文の序文があるが、孰れも人情の機微を穿つとか、古今の名

文であるとか、淨瑠璃禮讃の抽象論ばかりであつて、翻刻、刊行の動機徑路を知る手掛となる字句は無い。

これ等の事項は、初期の院本翻刻史中の、最も重要な項目として、闡明さるゝことを要するが、特に筆者が知らんと欲するのは、丸善の店員としての早矢仕民治が、これ等の仕事に參與してゐるや否、參與してゐるとすれば、どんな立場に立つてどんな役割をしたかである。これは後年その手によつて刊行された武藏屋本の、依つて來る處の意義に重大なる關係があるからである。

筆者が知る限りに於て、武藏屋本の刊行に關して記述された文獻は、内田魯庵氏によつて遺されたものがあるのみである。それは、明治廿九年二月十五日、毎日新聞に書かれた「時文偶評」中の一節、(早稻田文學、同年三月下旬の第六號、彙報欄に轉載さる)と、大正十二年十二月廿九日、淀橋常圓寺で催された近松二百年忌の席上で爲された講演とである。講演の要旨は、高野辰之氏(東京朝日新聞、後に「歌舞演劇講話」に採録)と、山口剛氏(早稻田

文學、後に「斷碑斷章」に採録、山口氏は席上に在つたが、耳が悪い爲め、講演を聴くことが出来ず、後に黒木勘藏氏に又聞きして、記述したものであるといふ）とに依つて、その會合の記録として摘記されてゐる。三村清三郎氏の「本の話」にも、武藏屋本に關する一項があるが、これも魯庵氏の講演から筋を引くものであるらしい。

武藏屋本刊行の経緯に關するこれ等魯庵氏の所説は、語つて詳かならぬ憾があり、高野、山口氏による記述は、記憶を辿つて、後で書かれたものであるから、用語の末節に亘つて、魯庵氏の口吻そのままであることを期待し難きものであるから、孰れも隔靴搔痒の感が無いではない。魯庵氏は武藏屋の願問格で、親しくこの仕事に關與した一人であるから、あらゆる疑問を用意した上で、今一度仔細に語らせたかつたと思ふ。然し乍ら今はこれ等の文獻によつて、當時の事情を髣髴する外はなく、よくぞこれ丈でも云ひ遺して置いてくれたことを感謝すべきである。處で、その魯庵氏によると、「全書」及び「文範」の刊行は、全く民治の創意に出づるものゝ如くである。

叢書閣主人が初めて近松の作を出版せしは明治十四年なりしが、當時文學の嗜好幼うして、巢林子の名をすら知る者少かりしを以て、金石の名作も願る者無く、勢ひ已むを得ず一時中止し、其後明治廿二年の頃、文學勃興の機に乗じて、再びその翻刻に着手し、都門の有らゆる藏書家は固より、遠く人を京阪其他の地方に派して或は買収し、或は傳寫し、廣く異本を蒐め、識者に質して疑はしきを訊ね、誤まれるを正し、今日迄出版せるもの、時代と世話とを合して凡そ五十餘種、猶續々刊行して、竟には巢林子全集を大成する計畫なりと云ふ。今日巢林子の名洽く讀書社會に知られ、其名作を邊陲僻隅迄も傳播せしめ、所謂研究者と號するもの、机上に薦めしもの、之を叢書閣主人の功績なりと言ふも過褒にあらざるべし。余は叢書閣主人を以て、明治の讀書社會に近松を紹介せし重なる一人となすを躊躇せざるなり。

（時文偶評）

これは魯庵氏が自ら筆を執つたものであるから、最も信頼すべき記事である。冒頭の、民

治が近松物を出版したのを、明治十四年であるとしてゐることゝ、末文の、最初の近松紹介者を民治であると断定してゐる一節とが、「全書」とも「文範」とも明示してゐないが、年代から云つて、二書の出版に於ける民治の位置を説明するものと見るべきである。

近松忌に於ける魯庵氏の講演中、十四、五年本に關する條りは、高野、山口氏によつて次のやうに記されてゐる。

明治十四五年と記憶するが、やまと文範と題して義太夫節の名高い語り物數十段を載せたものが出た。これがそも／＼淨瑠璃翻刻の始めで、次で近松著作全書と題して上下二冊、いはゞ博文館の帝國文庫といつたやうなものが出た。これが近松の作を翻刻した始めだと思ふ。共にそれが今の丸善書店が発行したと聞いたら、恐らく奇異に感ずる者が多からう。今洋書の取次販賣と工業書の發刊とを看板としてゐる丸善がとは何人も思ふ筈だが、當時この書店に早矢仕民治といふ義太夫狂があつて、此人が勧めて發行せしめたものであつた。夙くも近松の作に傾倒した早矢仕君の熱心努力は非常

なものであつた。當時丸本の價はごくやすくて一冊五錢そこ／＼であつたが、近松の作となると、さうどこにもあるといふ譯にも行かず、東奔西走のあとに、彼處に一冊、こゝに一冊と購求し、借覽して、とも角七十幾種を六十冊ばかりにして出した。これが世にいふ武藏屋本である。賣れることは賣れたが、費用もかゝつたので、結局は損失に畢つた。

(歌舞演劇講話)

丸善の當時の主權者、林^{ゴウ}氏の親戚の林^{ゴウ}民治といふ人が、丸善が文藝物を出さなかつたに拘らず、近松淨瑠璃集を二冊出した。これはその人の道樂であつた。その後その人は、丸善をよして、湯嶋天神下に本屋を出したが、小資本のかなしさに大部の書を出すことが出來ず、仕方なしに近松物をつぎ／＼に出版した。これが所謂武藏屋本である。武藏屋とは勿論その屋號であつた。

(斷碑斷章)

三村清三郎氏の「本の話」の記事は左の如くである。

もとは近松など云ひても、一部の芝居ものが知つてゐる位のものにて、世間には餘り顧みられざりしなり。然るに明治十四年頃やまと文範といふ帝國文庫ほどのものを丸善にて出版したり。これは淨瑠璃の丸本を翻刻したる始めなるべし。次で近松著作全書二冊を出版、これは丸善の重役何某といふ人の縁ありし林^{ワタ}民治の道樂仕事なり。

(本の話)

以上三者による三様の記述には、固より文字の増減があるが、魯庵氏の講演が、「近松著作全書」刊行の動機を、全然民治の個人的趣味に歸して、その熱意が丸善書店を動かして、斯の畑違ひの出版を敢てせしめたものであると断定し、「やまと文範」の出版すらも、民治の仕事であるとしてゐることは、三様の記録が一致してゐる處であつて、魯庵氏が自ら筆を執つた「時文偶評」に「叢書閣主人が初めて近松の作を出版せしは、明治十四年たりしが」と、全く丸善の名を抜きにした記述と吻合してゐる。思ふに、後年叢書閣の近松翻刻の仕事に關與した魯庵氏の眼中には、親炙した民治の近松に對する熱狂振りのみが、強く印象されて、

不識不識斯の書を爲したのであらう。

我等近松翁淨瑠璃の印行に志してより十年に過ぐ。或は藏書家を尋ね、或は京阪に求め、故紙堆裏より拾集して、今や漸く此「近松淨瑠璃」を完成するに到りぬ。是皆江湖諸君の賜物なり。爰に謹むで其恩眷を謝す。

これは、明治廿五年四月八日の日附がある、武藏屋本の合本「近松世話淨瑠璃」(自元祿十三年至寶永五年)の巻頭にある、民治の自ら記した例言の一節である。「十年に過ぐ」は恰も「文範」と「全書」とが刊行された年代に當るので、魯庵氏がこれ等の出版を、民治個人の仕事と斷定してゐることを、或程度裏書するもので、少くとも、二書の出版に民治が關與してゐたことは肯定し得る。

しかし乍ら、「全書」の第一巻が刊行された明治十四年は、民治の廿四歳に當る。「故紙堆裏」に埋没してゐた古版の丸本以外、何等の資料が無かつた當時に在つて、この一卷三篇の刊行には底本の蒐集、判讀、飜字、校訂等の準備に數年を要したであらうから、初めてこの計畫

が建てられたのは、民治廿歳そこその時でなければならぬ。多年讀書社會に忘れられて、一度湮滅した近松の藝術を、世に先立つて新に發見し、再生するといふ劃期的な事業が、廿歳の若者によつて、全く獨力で企畫されたと考ふることはどうであらうか。素養の點から云つても、後年武藏屋本を續刊するに當つて、仕事の學問的な部分は、すべてその道の先輩の手を借りねばならなかつた民治が、全く獨創的にこの仕事を考へついたとすることは、頗る不自然であると思はるゝ。この出版によつて、民治がシテ役であつたにせよ、或はワキ役であつたにせよ、當然他に幾人かの登場人物があつて、出版の計畫が建てらるゝ上に、色々な経緯があつたことは想像するに難くない。「著作全書」は結果に於て、二卷、六篇に止まつたが、その書名が示す如く、最初の計畫としては近松の作品を網羅せんとする大規模なものであつたと信ぜらるゝから、その出版方針は、さう簡單にきまつたものとは考へられないのである。魯庵氏の言が、抽象的に民治の功績を稱揚するに止つて、これ等具體的な業績に及ばなかつたのは遺憾であつて、院本翻刻史中の、最も重要な一事項としても、民治の事業の内

容を検討する上から云つても、是非とも闡明せねばならぬ題目である。少くとも此の間に在つて、一人だけ名前の判つてゐる「やまと文範」の編輯者、小野田孝吾とは如何なる人であるかを明かにし度い。

早矢仕四郎翁は、「近松著作全書」の刊行と民治との關係に關する筆者の質問に答へて、「著作全書」の計畫や編纂は、誰がやつたか判りませんが、民治が關係してゐたとは思はれません。後年民治が院本の翻刻に興味を持つに至つたのは、「著作全書」や「やまと文範」に刺戟された結果ではないでせうか。武藏屋本の出版中も、計畫や段取りは、すべて箕村さんや、得知さんによつて建てられて、民治は唯その指圖によつて動いてゐたに過ぎません。もともと民治は純粹な商賣人であつて、院本趣味といつても、商賣人、出版者といふ立場からの趣味に過ぎなかつた。近松の文藝の内容に立入つて、賞玩した譯ではなく、文學者扱ひにすることは當りませぬ、と云はれた。民治を文學者扱ひすることの見當違ひであることは、翁の説の如くであらうが、「全書」「文範」に關する翁の所説は、甚しく魯庵氏の記述と背馳する

ものであつて、翁の幼時の記憶である故を以て、全面的には首肯し難いものとする外はない。唯魯庵氏が民治の功績を顯揚するに急で、若干誇張されたかも知れないのを牽制して、當時に於ける民治の位置を臆測する参考資料とするに足りよう。

その間の事情が奈何であつたにせよ、丸善書店の院本翻刻の事業は、もと／＼商賣違ひの畑である無理があつたことゝ、時勢に伴はなかつた爲めに、二書の營業成績が思はしくなかつた理由で、續刊が不可能となつた。この時自動的か、他動的かは別として、この事業に特異な興味を持つた民治は、刊行の中止を遺憾とし、已み難い執着を持つに至つたのであらう。而して數年後に至り、獨立して叢書閣を經營するに及んで、奮然獨力を以て、宿志を爲し遂げようとしたのが、即ち武藏屋本刊行であることは間違ひないであらう。最小限度に解して直接民治が手を下したものでないとしても、「近松著作全書」と、「やまと文範」とは、後年の武藏屋本に對して、親と子との、極めて密切な關係があることは、看過することが出来ぬ。

叢書閣獨立當時に於ける民治の業績を語るものに「近松著作全書」の再版本がある。この版は、初版の第一、二巻を合本したものであつて、新に印行したものでなく、原版の殘本を整理する爲めに改装して發賣されたものであることは、二版を對照して見ると、隨處にその證跡を見らるゝ。新版の奥付は、原版第二冊と同じく、本文最終頁の裏面にあるが、この奥付を新にする爲めに、本文が最終の一頁のみ新に印刷されたものに置換へられてゐることが、紙質、インキ、活字の様式等の相異から、明瞭に看取さるゝ如きその一例であるが、その新しい奥付には、左のやうに記載されてゐる。

明治十四年十一月十日第一冊出版御届

同 十五年四月廿九日第二冊出版御届

同 廿一年六月 再版合本

編輯出版人 東京府平民

丸 屋 善 七

神田區宮本町五番地

發行所 叢書閣

神田區宮本町五番地

編輯出版人丸屋善七の名は初版の通りであるが、これは唯名を存したのみであつて、この再版合本は、全く民治によつて爲されたことは、發行所叢書閣とあるばかりでなく、丸屋善七の住所が神田區宮本町五番地とあることによつて知らるゝ。この版の發行は、奥付に二十一年六月とあること前記の如くであるが、これもこの版の爲めに、新に用意された扉には「明治廿一年五月再版」とあつて、初めは五月に出す豫定であつたのが、六月に延びたのであることを示してゐる。叢書閣が丸善から獨立したのは、廿一年四月のことであるから、この「近松著作全書」の改装は、獨立と同時に、恐らく最初の仕事として着手されたものである。何を措いてもこの仕事が先づ爲されてゐるといふことは、よし夫れが單なる殘本の處分といふ、手のかゝらない、取つつき易い仕事であつたといふ理由があるにせよ、亦民治の多年已み難

い關心が、院本翻刻に在つたことを示すのである。

廿二年十月、「天智天皇」によつて、狹義の武藏屋本刊行が創められたことは前記の通りであつて、叢書閣獨立から、この時まで、丁度一年半を經てゐる。この間、民治は營々として古刻院本の探求、蒐集、その校訂、翻字、或は資金の調達等、武藏屋本刊行の準備に没頭して居たことであらう。

出版の苦心

武藏屋本は徹頭徹尾早矢仕民治の血の出るやうな苦心の結晶である。吾人は後代の文運に貢獻した結果から見て、この先覺者の偉大な功績を承認することを別にして、それが完備した機關によつて、出づべくして當然出て來たのでは無しに、無力な市井の一書肆の手による慘憺たる苦心の産物であることを思つて、そゞろに頭が下がるのを禁ずることが出來ぬ。

武藏屋本刊行の苦心は、資金の調達と、底本たる古刻院本探求の困難と、その判讀、翻字

の不如意との三項を數へらるゝ。

資金難に就ては、上記魯庵氏その他の記録中に「僅の資本にて古本屋を開き」「小資本のかなしさに」とあることや、「賣れることは賣れたが、費用もかゝつたので、結局は損失に畢つた」「末路は氣の毒な様なりし」などゝある斷片から、さもあつたらうと想像さるゝのみである。廿五年頃から、最後の廿九年頃に亘つて、處々に混つてゐるところの、他の卷の爲めに用意されて不用になつた表紙に、題簽を貼り付けて流用した不體裁な卷や、末期の廿八、九年に出された、表紙の紙質がぐつと落ちて、凋落の色が濃いい卷などを手にして、この畢生の心血を灑いだ出版に、斯うした見すばらしい装幀をせねばならなかつた民治の心事を思ふと、目がしらの熱くなるのを覺ゆる。

底本蒐集の困難は、東奔西走云々と魯庵氏も云つてゐる如くであるが、武藏屋本を緝くと、隨處にその跡が滲んでゐるのを見ることが出来る。

古來梓に上りたるものは世に丸本と稱するものにて、單に梨園社會の用を計りたるも

のなれば、之を見るも何となく煩しき心地し、且つ其刻本とても目を追ふて散逸に流れ終には迹を斯文壇に絶する憂なきにあらず。依て弊書屋茲に同氏著作を刊行せんとし、先その刻本中世に稀なるものよりして、之を美麗好尙の冊子に綴り續々發行す。

大方博雅の君子弊書屋の微衷を容れ、愛書の榮を賜らんことを。出版者謹白

(二三・六・二〇「十二段」三版、後付)

これは武藏屋本刊行の總論的宣言であつて、抱負の在る處を表はしてゐる。「世に稀なるものよりして」とあるのは、「天智天皇」「十二段」が初めて出た時、之を紹介した朝日新聞(二二・一一・三)に、「成るべく世にその類本少きものより擇べるにや」云々とあつて、當時の出版方針がそこにあつたことを窺へるが、底本探求の困難は、必ずしも方針通りに遂行することを許さなかつた。

左記の原本御所持の方有之候は、當時の市價を以て御讓受を願ひ度又御秘藏のものならば、相當の寫字料を呈して拜借致度候に付左へ向御通知被下度候

神田區宮本町五番地

叢書閣

日蓮上人記 近松門左衛門作

おかめ 卯月の色上 同人作

碁盤 跡追一段物 同人作

聖徳太子繪傳記 同人作

夕霧阿波鳴渡 同人作

(二四・一〇・二二「鎗權三・壽門松」後付)

この時武藏屋は既に卅五六篇の近松物を出して居り、殊に廿三、四年の二年間は、矢繼早に、それを出した時であるから、そろ／＼材料の缺乏に艱しむに至つたのであらう。

我等近松翁淨瑠璃の印行に志してより十年に過ぐ、或は藏書家を尋ね或は京阪に求め故紙堆裏より拾集して今や漸く此「近松淨瑠璃」を完成するに到りぬ。是皆江湖諸君

の賜物たり。爰に謹むで其恩眷を謝す。(二五・四・八合本「近松世話淨瑠璃」例言)

これは前にも引用した文句であるが、魯庵氏の所謂東奔西走云々に當る底本探求の苦心の總説である。

本篇(合本「近松世話淨瑠璃」二卷を云ふ)集録する處、二十三種(實は廿四篇)他に卯月色上、二十五回忌及び千日寺心中ありといへども未だ原本を得ざれば、之を省きつ。

世の藏書家願くば其秘本の謄寫を本舖に許すあらば其幸や大なり。(同 上)

(版刊書目のあとに) 右の外 上卷 千日寺心中 笠屋三勝 二十五回忌等頗る疑はしきもの 苜屋半七

多かれば此際之を識者に正して出来る丈完備せんと欲すれども弊舖猶得ざるもの少からず。世の義俠者弊舖の微意を幫助して秘藏の借覽を允し、或は之が紹介をせらるるあらば幸甚。

(廿五年頃の諸卷後付)

苦心、焦慮のあと、歴々たるものがある。

謹告四方諸彦

本篇夕霧阿波の鳴渡は極めて珍本にして、世之を傳ふる頗る稀なり。左れば四方を捜索して、漸く一本を得たれど前後二ヶ處脱葉あるをもて、恰く江湖の藏書家及び院本癖の人々に質したれど終に其片影だに認むるを得ず、本舗深く之を惜しむと雖も、又是れ巢林子屈指の名作たとひ缺くる處あるも照成の璧空しく其光を韜むるを欲せざれば是を活字にして、廣く江湖の識者に教を乞はんとす。四方の讀者幸に原本を藏し給はゞ又其書の在る處を知り給はゞ、乞ふ本舗の爲めに紹介して以て缺を補はしめよ。是獨り本舗の幸とするのみならず、今日の文學界を裨益する處あるは勿論、近松巢林子の靈も必ずや、また苔下に莞爾たらむ。

(二四・九・一〇、「冥途飛脚・夕霧阿波鳴渡」前付)

この「前後二ヶ處脱葉」とある「夕霧」の缺文は、この版で云つて、第一頁の下半より第

二頁の初め四行ばかりと、第廿五頁の末尾から、最終迄の三頁ばかりとである。廿五年四月に出たこの巻の再版本も缺文のまゝで、「謹告四方諸彦」がついてゐる。

夕霧阿波鳴渡は稀世の珍本なるをもて曩に脱葉のまゝを上梓し、洽く世の藏書家に補缺を求めたりしに、爰に殆ど一年に垂んとして、漸く一本を得て之に依て其缺けたるを完ふし以て江湖の眷顧に負かざるを得たり。是獨り弊舗の幸のみならず、江湖も亦此絶代の完璧に接して嬉々たるもの多からむ。而して此施恩者は鶴澤清次郎氏。

(二五・七・一九「百合若・卯月潤色」後付)

この「夕霧」完本の發見報告文を載せた「百合若・潤色」初版には、その「夕霧」の補文第一、二頁の全文と、第廿五頁より最終の廿九頁迄とを添付してある。待望の完本を發見するや否や、その篇の重版を出すのを待ちきれないで最近に出した別なこの巻に、取り敢へず缺文だけを添補したのである。「夕霧」が首尾全く印行されたのは、廿六年八月に出た第三次版からである。發見報告文はその頃に出た他の諸巻にも散見する。よほど嬉しかつたものと

見ゆる。底本探求の悩み、不完本を得て取り敢へずそれを版行せずには居られなかつた已み難い執心、それにも拘らず猶且それに安住し切れないで、更に完本をもとめて已まなかつた焦慮、而して最後に志が酬いられて、とう／＼完本に巡り逢つた欣喜雀躍の状、盡く目睹するが如くであつて、世の賣りさへすれば能事足りる書肆流者の類でないことが、はつきりで見らるゝ。「文學界を裨益する處」あらんと云ふも、「江湖嬉々たるもの多からん」と云ふも、出版廣告文の常套語であるがこの場合は空虚な一片の辭禮でなく、近松翁が地下に莞爾たらんといふも、如何にもその通りだと首肯るゝ。

(已刊書目中の「卯月の紅葉」のあとに) 但し後日の色上は原本を洽く藏書家に質したれども、終に得ること能はず。

(二四・一〇・三一「氷の朔日・歌念佛」後付)

「卯月の色上」(「潤色」)は、「夕霧」と共に、前にも屢々出て來た待望の探求本であつた。

卯月の潤色は深川の藏書家西田氏の秘藏にして、之を紹介せられしは關根只誠先生な

り。爰に容易に其秘本を上梓するを允されし二氏の好意を謝す。

(二五・一一・一〇「百合若・潤色」後付)

「潤色」も「夕霧」と併んで、探求一年餘にして、苦心が酬いられた。日を同うして語るべき一對の佳話である。

本書傾城吉岡染は弊舗が翁の著書出版に着手以來、専心搜索すること多年漸く一本を得たりと雖も、惜哉蠹食の爲めに支離滅裂、辛じて推讀し得るに過ぎず、加ふるに卷末數葉を缺く。然りと雖も、金玉の文字空しく筐底に没すべからず、暫く原本の儘を印行して以て大方の是正を待ち、併て本書の原本を藏するの士に其借覽を許されんことを希ふ。これ獨り弊舗の幸のみならず、亦文學上の裨益少なからざるべし。

(二九・一・一〇「天鼓・吉岡染」後付)

こゝにも「夕霧」と同じやうに、不完本を刊行した苦心のあとが残つてゐる。唯この卷は武藏屋本の最終巻であつて、その刊行を名殘として武藏屋は没落したのであるから、そのあ

とに完本發見の喜びが続くに至らなかつた。

思ふに武藏屋主人が、斯うした探書の希望なり、發見の報告なりを、とある巻頭又は巻末に附記したのは、よくせき苦しんだか、餘りにも嬉しかつたかの、黙つて居られない氣持の一端のみであつて、かうした一喜一憂は、一篇毎に、一卷毎に、前後を通じて武藏屋本につき纏つたことであらう。

古刻本の假名文字を判讀、翻字する苦心、困難も、底本の蒐集のそれに劣らぬものがあつた。黄表紙、草双紙のやうな、同じ假名書でも、夫れに相應した卑俗の文章であればまたしものであるが、近松の作品には、佛語、古典の、さなきだに難解の字句を、無造作に假名で書き流してあるのである。當時に在つてそれを解釋し、適當な文字を當て嵌める仕事の困難は、名狀すべからざるものがあつた。

魯庵氏は常圓寺に於ける講演の中に、この點に言及して斯う云つてゐる。

根が癩癩持の逆上屋であつたから、功勞はあつても、見落されるといふ種類の中に入

つてしまつたけれども、功勞は功勞で、かの讀みにくい假名書を漢字にする丈でも大したものでさう學問のない男であつたから、一々人に相談しなければならなかつた。

饗庭篁村君や自分は何時も其の相談をうけたのである。
(歌舞演劇講話)

又、魯庵氏は次の様にも云つてゐるやうである。

その人(民治)は丸本の彙集にも校訂にも熱心であつたが、さまで學問がないので、魯庵さんが勧めて、わからない事は饗庭篁村さんの教を受けさせた。(斷碑斷章)

高野氏の筆録によれば、篁村、魯庵二氏は併んで相談役であり、山口氏の記述では、魯庵氏は橋渡しであつて、篁村氏が獨り相談に乗つたやうに見ゆるが、魯庵氏は何と云つたのであつたのであらうか。魯庵氏の言が、その孰れであつたにせよ、廿五年に出た武藏屋本の合本「近松世話淨瑠璃」に、氏は堂々と近松の藝術を論じた長文の序文を書いてゐたり、後のことではあるが、氏は丸善の人となつて晩年に及んだやうな緣故があり、當時から相當に面倒を見てゐたものと思はるゝから、思ふに氏は直接の顧問格で、氏に疑問があるやうな點

は、箕村氏へ持つて行つたといふやうなことであらう。

廿九年二月の「近松時代淨瑠璃」の例言には、

弊舗院本の翻刻に従事して以來、屢々識者の門を敲きて教を乞へり。一々數ふるに違
あらず。就中關根只誠先生、饗庭箕村先生、竝に金澤の藏書家松岡恒太郎等の諸君の
厚誼を辱ふしたるは、弊舗が深く感銘する處なり、茲に謹みて其恩眷を謝す。

とあるから、關根氏も關係者の一人であつたことが判かる。

筆者が早矢仕四郎翁に聽いた談片中に、「武藏屋本出版中も、計畫や段取りは、すべて箕村
さんや得知さんによつて建てられて、民治は唯その指圖によつて動いてゐたに過ぎません」
と、こゝに幸堂得知氏の名が出て來ることは前に記した如くである。翁の話の前後には、

丸善で始めた院本の翻刻が、永い間中絶したのは、商賣上うまく行かなかつた爲めに
外なりません。それが明治廿年代になつて文學復興の氣運に乗じて幸堂得知さんや、
饗庭箕村さん等の懇懇によつて、その人々を顧問にして民治が復活することになつた

のが、武藏屋本だといふことになります。

とあつて、箕村氏と並んで得知氏の名が反覆されてゐる。それにしては民治の手記や、魯庵氏の講演の中に、得知氏が出て來ないのは不思議であるが、如何にも氏の顔が出て來さうな場面ではある。民治の手記中に「屢々識者の門を敲きて教を乞へり、一々數ふるに違あらず」とあるのを見ると、教を乞うたのは程度問題であつて、この外にも何人かの關係者があるのであらう。

それ等の大家連の應援があつたに拘らず、時代が時代であるので、校訂、翻字の業は、猶更痒い處に手が届くといふ譯には行かなかつた。或る字句に逢着して、顧問連に、さアそれはと首を傾けらるゝと、それ以上には奈何ともすることが出來なかつた。明治廿四年十二月の「近松世話淨瑠璃」の緒言には斯う書いてある。

原板印行既に遠く、改版また重なるを以て大に明瞭正確を缺き、其間まゝ疑ふ處多しと雖も、漫りに陋劣の識を以て改竄を加ふるは罪頗る大なるを以て、總て舊本に従ふ

て少しも改むる處なし、畢竟近松翁を貴ぶの餘りなれば、有識の士其誤れるを正し、其足らざるを補ひ、以て世に幸せよ、獨り弊舖の爲めのみならず、江湖必ず感謝する處あらむ。

原板といひ、改版といふのは、古刻の院本を謂ふのであらう。字句に疑はしい箇所があつても、漫りに改竄を加ふことは、著作者に敬意を失することになるから、敢てせぬといふことゝ、有識の士は誤を補足せよといふことは、聊か矛盾するやうであるが、それは判讀、翻字に不安があることに對する、申譯の氣持の表はれであると讀まるゝ。事實魯庵氏も云つてゐるやうに、武藏屋本は随分誤謬もあるし、どうしても判らなかつたと覺しき箇所は、そのまま假名書で遺してある處も多く、決して完成された翻刻書であるといふことは出来ぬ。然し乍ら、今日多數の專攻者により、長い時間を経て研究が蓄積され、無数の註釋書が出で來り、「近松語彙」、「近松戯曲用語辭典」(大近松全集終卷)といふやうな、専門の辭書迄も出來た時代を標準として校訂、翻字の適否を指摘し、揚足をとるやうな批判をすることは無理で

あつて、さうした幼稚な時代に、専門の學者でもない市井の一書肆の手によつて、これ丈の叢書が纏め上げられたことは、寧ろ驚嘆すべきである。それ丈にこの仕事に當つての武藏屋主人の苦心は、今日からは到底想像も及ばぬものがあつたのであらう。

武藏屋本の反響

武藏屋本の卷末には、屢々當時の新聞、雑誌の本書に對する批評が摘記されてゐて、この書が如何に世人の眼に映じたかの一斑を知る資料を提供してくれる。

(貴女の友) 院本の著者にてその名を知られたる故人近松門左衛門氏が前後著されたる院本その類甚だ多しと雖も、日を経るの久しき遂に散亂し、今日に至りては殆ど時にその迹を絶つに至らんとす。曩に丸善近松著作全書と題し、同氏の著作に係る院本を翻刻し、逐次之を發行せんと計畫せられたりしも、時期未だ至らざりしを以て僅に六種を上梓せしのみにて中止せり。然るにこの頃再び近松翁叢書と題し天智天皇十二段の二本を

翻して發行せり。文章と趣向とは今更多く辯ぜずもがな書肆が時期に投ずるの機敏と漸く將にその跡を絶たんとするの今日に此舉ありしを祝賀するなり。(二二・一一・一五)

(日本人) 英のシエクスピアーは各國共に尊んで古今絶無の詞宗となす。是れ何の爲か。蓋し、其意匠の緻密迫神にして語辭の穿眞なるが爲のみ。其「シーザー」「マクベス」「ヲセロ」等を読めば、眞に數百年前數百千里外の人に逢ひたる感を起すなり。是即ち、シエクスピアーの古今に無比なる所以なれども、退きて考ふるに未だシ氏の著を繙かざるに余輩の多くは既に腦裏に其巧妙を描くなり。何となればシ氏は各國人一般に賞揚する所なればなり。而して西洋崇拜の熱度高まる丈け益々其巧妙を感するなり。我近松氏の如きも之を熟讀玩味するときは、其意匠の幽邃巧妙なること、實にシ氏の「シーザー」「マクベス」等に劣らざるものあり。只社會の程度風俗の差違よりして、彼れが著は王侯貴人百代の後に之を愛誦し、此れが著が空しく東洋孤嶋中の一部分の人に知らるゝのみ。而して其中にも既に湮滅に歸せんとするものあり、豈惜しむべきの至りならずや。早矢仕

氏之れを憂ひ、逐次翻刻して之を後世に傳へんことを計る、美擧と云ふべし。此頃は西洋の小説とさへあれば意匠も組織も淡純無味なる者を、尙且餓虎の肥兎を争ふ如くに賞讀して却て己れが國人中幾等超ふるの著あるを知らざるとは、人心程奇妙なる者はなしと言ふべし。(二三・一・一八)

(朝日新聞) 平安堂著作出版を目的としてその第一番として刊行せしものゝ由なるが、成るべく世にその類本少きものより擇べるにや、今回は此源氏十二段と天智天皇との二冊發兌せられたり。近來日本文學の王政復古といふことにて、ヘタな屑屋が糶市にあらねど、矢鱈と蟲入澤山の古本にのみ目を着けることが流行することながら、同じ元祿穿鑿の道樂の中にも、此等は誰ありて不の字を言ふものなかるべし、澤山發兌あられて好し。(二二・一〇・三)

一は西洋崇拜を罵り、他は古典耽溺を嘲つてゐる對照が、そつくり現代にも當て嵌るのが漫ろに微笑まるゝ。「日本人」子の沙翁買被り論は、當否は別とするも、鹿鳴館で貴顯淑女が

踊り狂つた苦々しい時代が時代であるので、相當思ひ切つた一個の議論であると云ひ得る。

(學の花) 誰か言ふ日本の文學は幼也と。然れども奚ぞ知らん。東洋のシエクスピアーを以て目するも、過評に非るべき近松翁は幾多の名著を存して、今や益す日本國內其聲名赫々たらんとは。看よ翁が著作、譬へば淨瑠璃の如きに於てすら、尙能く人を感動せしめて、彼の寄席に義太夫師が幾多の人々を喜嘆せしむるに非ずや。其濃淡粗密或は喜ぶべく、愛すべく、或は痛むべく悲しむべきものありて、氣韻の清秀純逸なる實に日本特有の美文といふべし。シエクスピアーの「オセロ」何かあらん。リットン「クレムペス」又何かあらん。吾人は如何にしても世に翁の著作を讀過して必ず一掬の熱涙を揮はざるが如き無神經のものあるべきと信する能はざるなり。さりながら、憾むらくは只此名著にして終に東洋孤嶋の一部に知らるゝのみ。加ふるに、其中にても幾んど湮滅に垂んとしたるものなきに非ず。豈惜しむべきのことに非ずや。偶々早矢仕氏之を嘆き續々出版して博く世に流布せんとす、其學や眞に美なり。只翁の著は孔子の春秋能く後進

の一筆をだに加ふべからざるもの、却つて彼此批評するは吾人が本意に非ず。氏が美擧と俱に、翁の傑著たること幾ど讃辭に苦しまんとす。(二三・一一)

これは宛然たる「日本人」の口吻であつて、斯う並べて見るとお里が知れるが、武藏屋本のみ美擧呼はりは、我意を得たものである。

(小日本) 近松の淨瑠璃が、今日の芝居にならぬとて攻撃するは、昔の戦が斬り合ひでありしとて笑ふやうなもの、野暮の野暮の骨頂なり。近松以後、これ程の文章は果して誰が眞似致せしや。馬琴とて三舍を避くるを、況や其外をや。先に世話物を一冊となし今又時代物を一冊となす。實に文學者必携と云ふべし。櫻痴、學海諸氏チト此本を讀まれては如何。(二七・五・二一)

これは合本「近松時代淨瑠璃」(自正徳五年十一月至享保四年二月、發行二七・四・二四)が出た時の批評文である。「先に世話物を一冊となし」は合本二冊の誤りであるが、筆鋒の鋭い處から見て、この一文は當時の編輯者正岡子規の筆に成るものではあるまいか。

(東京新報) 從吾所好、其二十三、抱一庵主人昨暑熱俄かに加はる午下任意の文を取り、罷むで喫茗一碗せんとする時刺を通ずるものあり、延て見るに老撲閑雅の人哀然たる一本を余に致し膝を進めて曰ふ、先生余が十年の丹精を味へよと。把て之を繙くに、ア、是れ巢林子一代の作のうち其所謂世話物大概を網羅せるもの問はずして知る此人是れ叢書閣の主人早矢仕民治氏なるを。天下快事尠からず。然れども書肆の一向に利に奔らず懇ろに遺書を拾ふて、之を鮮明なる印刷に上するを見るほど、吾徒心に快きはあらず。巢林子の作存するものは存して多くあるも、其獲難きものに至りては本邦に一本を存するや、將た存せざるやも、圖られざるなり。早矢仕氏すなはち或は遠く書を遠國の古舊に飛ばして之を索め、或は素封の家の秘庫に就き之を謄寫し、拮据勉焉茲に十年を費して世話物二十三種を纂め、わづかに卯月の潤色(此書今は原本を得て出版せり)笠屋三勝西屋半七二十五回忌上卷、助六千日寺心中の三本を缺くを憾みとするのみ、其志實に多とするに足る。方今の文家が動もすれば、世人の嘲笑を招くの原は堅實の志に乏しき

に由るつねに多きなり、ア、文を取るものにして文を版するものに如かざるべけんや。

主人辭し歸るとき、余は階段に立ち其後背を望み慨焉たるもの之を久うす。(二五・七・五)

この民治が携へて抱一庵を訪うた「哀然たる一本は、合本「近松世話浄瑠璃」(自元祿十三年至寶永五年)であつたと思はるゝ、「老撲閑雅」は唯四字のみであるが、今日寫眞すら残つてゐない民治の風貌を描寫した唯一無二の記録文字として珍重すべきである。「十年の丹精」

「拮据勉焉茲に十年」と十年が二度迄繰り返へされてゐること、未收の三本の題目が擧げられてゐること等は、この合本の卷頭にある例言から來てゐることが窺へるが、近松の作品の或者が稀本となつた條り、利に奔らずに、懇ろに遺書を拾ふて云々の一項など、抱一庵を相手に民治が掻き口説いた口吻の反映であると思はるゝのも懐しい。それにしても、抱一庵が民治の出版良心をも強く稱揚してゐるのは、我等武藏屋本黨に取つて嬉しい限りである。

未收本の中に「卯月潤色」の目を擧げ、括弧して、「此書今は原本を得て出版せり」と記してゐるのは、一寸注目を惹く。この合本の出版は二五・四・八附であるから、その時「潤色」

は未收本であつて、其の旨を他の二篇と共に例言に記したが、民治はこれを抱一庵に示して「斯う記して居ますが、この内「潤色」は、やつと探し出して既に出版しました」と語つたのである。その「潤色」の初版（「百合若大臣」と合巻）の日付は二五・七・一九となつて居つて、民治の抱一庵訪問（記事は七月五日付で、昨とあるから、七月四日のことであると思はるゝ）より後のことである。別に、表紙には「今宮心中」のみの題目があつて、内容はこの「潤色」が添付されてゐる版があつて、奥付を缺いでゐるが、「夕霧」と「潤色」との原本を發見した附記のあとに「辰年（廿五年）七月」とあるから、その月の出版であると推定する外は無いので、前掲の重版書目には、假りに七月十九日付の初版本をこの篇の初出とし、「今宮」に添付本を第二次本としたのである。今、七月四日の記事に「已に出版せり」とあるのは、その十九日付の初版本ではないから、或は「今宮」本が第一次本で、七月初に出たのではないか。尤も斯うした談片の斯うした記録のことであるから、「已に出版の準備中だ」といふ程度の話が「出版せり」となつたのかも知れぬから、必しもとつこ

に取るわけにも行かぬ。(この書今は原本を得て出版せり)とあるは、抱一庵の一文を武藏屋本に採録するに當つて、民治が挿入した字句であるかも知れぬ。

その他、吾人は今世の文學者が此等の書を涉獵せんことを切望す(國民の友)、「今ま翻刻書肆叢書閣が近松時代淨瑠璃を集めて翻刻したるは、蓋し世話物を措て時代物を薦むるにはあらで、飽く迄世話物を爛讀したる者をして、消閑的に變調夢幻的の淨瑠璃を一覽せしめんとの意なるべし」(同上)、「苟も日本淨瑠璃中祖の文章を知らんと欲する者の座右に缺くべからざるは此書也」(めざまし草)「日本文學の真相を知らましく思はゞ先づ同書を購讀すること宜しからん」(關東)、「苟も斯文學に志ある者は古本屋に廣く原本を搜索するの煩を避け座ながらにして翁の傑作を見るを得べし」(改進黨新聞)、「今回發行の分には近松翁の冥途飛脚と夕霧阿波鳴渡とを合せたり。此内阿波の鳴渡は世間之を藏する者尠く、發兌元叢書閣四方を搜索してやうやく一本を得たれど惜ひ哉前後二ヶ所脱棄してある事なし。依て完全なる原本を藏する人あらば、其缺を補はしめんことを江湖に乞へり書肆の熱心愛すべし」(同上)、「坊間

活版の翻刻は實に本書を以て開始とす亦以て其稀書なるを知るべし」(二六新聞)、「方今文苑新著佳作棟に充つ。而して丸善武藏屋二書店の殊に此書を刊行する者故なしと謂ふべからざるなり」(報知新聞)等、それ〴〵提灯を持つて居り、又「叢書閣にては豫て近松翁淨瑠璃本の出版に従事し、既に數十種を出版して世の喝采を博したるが(中略)體裁は何れも前出版の分に劣らず美本なり」(大阪東雲新聞)、「奇麗に丸本を印刷し其道の人を喜ばしむる武藏屋は近松翁の作を大抵發兌し、他の名手の作に係るものを印刷するに至れり、今度摺り出せしは大塔宮曦鑑なり次に出づるは何なりや」(東京新報)、「相も變らず製本美麗」(同上)など、装幀の美しさを稱美してゐる者も尠くない。

これ等の批評文の中には、一片の事務的な紹介に止まり、深い意味のない、いゝ加減なものも無いではないが、當時この叢書の刊行が、或程度存在を認識され、相當の反響を受けた状況を窺ふことが出来る。

前に述べた、多種多様の模倣本の續出も、武藏屋本が當時にもて囃された状況を想像せし

むる資料である。漱石の「猫」のあとの、「我輩は何とかである」の流行、「續不如歸」、「新金色夜叉」の類の續出は、その大部分が内容、外觀共にとるに足らぬ俗悪な三文版に過ぎないので、どうせ原著の人気之餘勢を借りやうとする程の出版物に、實質的な價值などがありやうは無いのであるが、これ等模倣本の種類及び量は、原著の人気に比例するといふ見方から、その原著の發表當時に於ける人気を溯つて測定する資料として、書誌學的な意義があり、興味がある。曾つて筆者は正岡子規の文獻を漁つて、だん／＼蒐めて見ると、それ迄氣にも留めなかつた「子規名句集」といつたやうな俗書の種類の多いのに驚いた。子規の俳句は、自選の「獺祭書屋俳句帖抄」碧梧桐・虚子選の「子規句集」、「子規全集」の俳句篇、乃至「寒山落木より」等の權威ある句集があれば事足りるのであつて、多種の「名句集」の存在は何の役にも立つものでないが、俳句に於ける子規の影響が波及した廣さと、深さを計る尺度として、捨て難いものと思はれ、事實筆者は俗版句集の蒐集によつて、子規の偉大なる一面を、新に發見したのであつた。丸本の讀めるもの、恰ど無かつた當時のこと故、文學

界に貢献すること一通りでなかつた。文學青年は必ず一本を机上に置くといふ有様であつた」と、魯庵氏は武藏屋本が持て囃された状況を語つてゐるが、模倣本續出の事實は、さもあつたらうと、それを裏書きすることに役立つてゐる。

重版の徑路を見ることも、この叢書が流布された程度を知る手が、りとなる。筆者が知る限り、武藏屋本の重版は前記の如くであつて、「戀八卦柱曆」「重井筒」「出世景清」の第六版迄出してゐるのを初めとして、第五版を出したものの七種、第四版を出したものの十種に及び、明治廿六年以後、武藏屋が凋落期に入つた以後に初版が出た數篇を除けば、再、三版を出してゐないものが無い。魯庵氏が「賣れることは賣れた」と云つてゐるのは、重版を見たゞけでも、さもあつたらうと首肯するものである。これを模倣本に就て見るに、「三十六佳撰」中の或る數篇に、第五版とあるのを見る外、概ね初版で終つてゐるらしい。

武藏屋本でも、近松以外のものは、「大塔宮曠鎧」が第三版迄出てゐる他は、皆初版切りの如くである。近松物が盛に重版された廿四、五年の刊行である「心中二つ腹帯、末廣十二段」、

「八百屋お七・三世二河白道」等が初版で終つてゐるのは一寸面白い現象である。

武藏屋本の功績

武藏屋本が遺した功績は、讀書界に資料を提供して、近松復興の機運を作つたこと、その後には續出した多數の近松翻刻物に、底本を供給したこと、二つを數へ得る。

高橋宏氏の「近松研究の過去と將來の命題」(東京帝大、演劇史研究學會編「日本演劇史論叢」)には、近松の作品を、讀物として取扱ふ傾向が、徳川時代から存在したこと、享保から文政頃へかけて、近松の多くの作品が、何回となく、色々の書肆によつて覆刻され、しかもその刊行に相當する年代には、舞臺で再演されたといふ如き證據がないので、覆刻はすべて讀物としての需要に應じたものであることを説いて、

明治に在つては逆に十四年から廿五年に亘つて出された武藏屋本の流行が、この風潮を馴致したのである。武藏屋本に就ては從來諸家の研究も多いことであるから、こゝ

には縷述しない。その影響の最大なるものは、坪内博士とその一門によつて試みられた明治廿三年以降の「延葛集」の研究、並にその發展である。明治廿九年以降の近松研究會の事業と、高山樗牛の近松論である。

と述べられてゐる。

樗牛と武藏屋本との關係に就ては、筆者は知る處はない。逍遙博士には早稻田の演劇博物館に遺されてゐる「近松淨瑠璃」と題する一卷がある。黒色の布表紙に題簽を貼付けて上記の題目を手記したものであるが、博士舊藏の武藏屋本を合綴したもので、卷頭に博士の寄贈に係る旨を記してある。合本の篇目は左の如くである。

會根崎 心中	薩 摩 歌	重 井 筒	二枚繪 双紙
戀八卦 柱曆	堀川波の鼓	卯月の紅葉	卯月の潤色
伊達染手綱	心中萬年草	歌 念 佛	今宮 心中
双は氷の朔日	生 玉 心中	鎗 權 三	壽 の 門 松

博多小女郎　　天の網嶋　　油地獄

以上十九篇、原巻の表紙、奥附等はすべて除き去られてゐるが、紙質、印字等から、その全部が武藏屋本であることは明瞭である。

文中には朱筆又は鉛筆等の書入が隨處に見らるゝ。いふ迄もなく博士の手記である。原文の假名書に漢字を傍書し、妥當でない翻字を修正し、科白にへを付し、句點を打ち、或は傍線を引いてあるなどの外、短い感想や、批評を記入してある。「言々流動」……「得て妙」等の文字が到る處に見出さるゝ。惜しむにも餘りあることには、合本改装の際上部が截斷されて、特に多い上部の空白を利用された書入れの、上方三分の一ほどが除去され、殆ど讀み難くなつて居ることである。博士の手澤本は、唯手澤本である丈でも貴重であるのに、ましてや、これは近松研究の萌芽ともいふべき最も記念すべき文字であるのに、心無き取扱者に依つて可惜疵物にされて仕舞つてゐるのは、取り返へしのつかぬ損害であると云はねばならぬ。

書入の多いのは、「伊達染手綱」「今宮心中」「鎗權三」の諸篇であるが、就中「鎗權三」は縦

横に書入れがしてあつて、單に讀み流されたものでなく、博士が研究の資料とされた痕跡が歴々として看取さるゝ。この篇は近松研究會に於て最初に取扱はれた題目であるが、この卷の書入れに「不自然」「突然去る」「露骨」「分らぬ充分」「筆の才が利きすぎる」等の文字が讀まるゝのを、研究會に於ける博士のこの篇に關する所説と對照すると、研究會に出席さるゝに當つて、勉強されたテキストが、この一卷であることが判かる。

この作に不自然（原文に圈點あり、以下同じ）の嫌あるは否み難し、按ふに年齢の一週りもちがふ男女の密通といふことは、誰が目にも著しく見らるゝ不自然にて、作者の側より云へば、面白き解釋も、新奇なる趣向も、こゝに挿み度き念を生ずべし。

「なつかしや」の一句は哀れなり、哀れなれども不自然の嫌はあり、不自然なれども哀れと思はしむる所、此の作者の腕ならずや。

げにしつこしといへば、川船の條にて、船頭が言葉に、「今よひ一夜はおかさまも胴切りにして、旦那のもこまぐに刻んで片づけて乗せまします。こゝらは構はず踏んぞ

つてのたれて御座れ」云々の句、何とやらん態とらしく、近松が平生の技倆に似ず、こゝらは筆任せの走り書なるべし。

不自然論、書きなぐり論の起原は明かである。古刊本を別として、當時武藏屋本以外には、資料が無かつたことゝ相俟つて、近松研究會に於ける博士のテキストが、武藏屋本であつたことは、疑を容るゝ餘地がない。演劇博物館が藏する、不具にされた見窄らしいこの一巻こそは、近松研究史上の、何物にも換へ難き記念碑である。而してそれが武藏屋本であることは、何といふ輝かしいこの叢書の功績であらう。

武藏屋本を底本とした後來の翻刻近松ものは、獨りその當時續出した薄つぺらな模倣本のみではなかつた。魯庵氏の講演はこれに就いて興味ある話題を遺してゐる。

近松物はその後も刊行せられた。が、すべて武藏屋本を底本とした。博文館が近松全集（帝國文庫をいふ）を出した時、原本が武藏屋本以外には無いと思はれるのが載つてゐる。林（早矢仕）は博文館本を自分の本とを比較した。武藏屋本の誤つた箇所は

そのまゝ誤つてゐた。林は憤慨して版權侵害の訴訟を起すと云ふのを、魯庵さんが漸く宥めて止めさせた。これが魯庵さんが語られた要領ださうだ。この博文館本の誤謬のはなしと、林氏の怒つた話が聴く人々を笑はせたのであつた。博文館本は水谷さん（不倒）の校訂に係る。魯庵さんは言こゝに及んだ時「こゝにお出の水谷さんの名前であるが、いづれ御自身の校訂でなく、人にやらせたものでしやうが」と断られたのであるとか、水谷さんの苦笑はそれに酬ゐられたのであらう。

（斷碑斷章）

これは山口剛氏の「近松忌に陪す」の一節である。前にも記したやうに、山口氏は自らその席に在つたのであるが、耳が悪いので、講演が聴き取れず、後に黒木勘藏氏に要旨を聴いたのであつて、その前の處に「内田魯庵さんがお話をなすつた。人々がよく哄笑する。譯を知らぬ私もついひき込まれて笑つた。魯庵さんが水谷不倒さんを指す。皆不倒さんを顧る。不倒さんは手を拱いたなり苦笑してゐられる」とある。魯庵氏が不倒氏を揶揄した光景が、

まざく」と目睹するが如くである。

しかし乍ら、魯庵氏の舌鋒で苦笑させられたのは、獨り不倒氏のみではなかつた。これも列席者の一人である高野辰之氏も、春陽堂版「近松門左衛門全集」の校訂者の一人であるので、「すべて武藏屋本を底本にした」を氣にして、その「近松忌」の記事の中で、ムキになつて魯庵氏に喰つてかゝつてゐる。高野氏による魯庵氏講演の筆記の續きには斯う書かれてゐる。

随分間違もあつて（武藏屋本をいふ）高野君などにも小言は喰つた。（これは翁の誤解である。私などはその頃やつと十三四歳で、武藏屋本は十七八歳の時に始めて見たのである。さうして間もなく帝國文庫の近松淨瑠璃集が饗庭さんと水谷さんの校訂で三冊出たので、それによつて通讀した。また武藏屋本の方が忠實であつたことは、固より認めてゐたが、其の頃にはもう原本たる正本を見てゐたので、別段武藏屋本によりもせず、随つてその攻撃などもしなかつたのである。但し明治卅年代に出た近松集に

對しては、その誤謬を指摘したことがある）しかし此のあとに出たものは、どれもこれも此の早矢仕君のやつたのを底本にしたものだ。大體院本の讀めるものが無くなつたのだ。（箕村翁が生きて居られたら、これはくゝといはれさうな所、私もひどくこれには恐れ入つた）攻撃はしても早矢仕君のやつたのに據つてゐたのだ。其後のものは一切それだ。何でも近松の作は、最近の説では百二十幾つかあると聽くが、それはもうとうに早矢仕君が調査し盡してゐた。その書留は現に自分の手許にある（中略）これが魯庵氏の話された梗概で、早矢仕さんの功績が近松忌の席上で語られたのは最も自然で、隨つて來會者の腦裏には十分な印象を止めたやうに見受けられた。但し自己防衛として少しばかり書くことを許して貰ひ度い。私と黒木君とで校訂した近松門左衛門全集十冊百四十七篇には、武藏屋本を底本としたものは一篇もなく、必ず近松當時の原刻によつた。さうして武藏屋本や帝國文庫とは方針を別にして、重要な曲節符一切及び句切り等迄悉く原本のまゝにして、多少なりとも其の語り口を想像し得るやう

に力めた。假名を本字に改めたものには、其の誤謬を發見したし、校正上の粗漏にも氣づいた處があつて、近き將來に訂正することにしてゐる。かう書きたてては翁にすまないが、自分の氣にすまないのを、ぢつと耐へて、其の場は善處してすまし、あとで蔭口をきくよりは、かう書く方が遙かによいと信ずるのである。書いた處で、早矢仕君の功績を輕減するわけでもなく、魯庵翁の話は光輝を増すの手段として、此を抑へて彼を揚げられたに過ぎぬと誰も信ずるに相違ない。

(歌舞演劇講話)

このひたむきの抗議は、高野氏自ら云つてゐるやうに、武藏屋本の功績を輕減しないばかりで無く、魯庵氏による表彰を、より力強く裏書する反對の効果をすら齎してゐるやうに見える。三四十年前の、草昧な時代に、何等の學問的素養もない一書肆の手によつて爲された仕事、文物備はり盡した今日に至つて、その道の専門の權威者をして、自分はそれに據つたのではないと、一生懸命に辯疏させるといふことは、驚くべきことでは無からうか。高野、黒木氏校訂の「近松門左衛門全集」は、汗牛充棟の觀がある翻刻近松物のあとに、近松

研究の蓄積を承けて成つた最も權威ある近松全集の一つである。假令それが魯庵氏のいくらか誇張されたかも知れない武藏屋本禮讚の辭に、對抗して出で來つた言葉であるにもせよ、高野氏をしてこの言を爲さずには已む能はぬ程であるから、武藏屋本に續いた時代に續出した近松翻刻は、どれもこれもそれを底本にしたといふ魯庵翁の放言は、さもあつたらうと肯定さるゝのである。

その武藏屋本自體は、今日已に湮滅して仕舞つて、讀書人の目に觸るゝことがなくなり、その名を識る人さへ稀になつたのであるが、直接間接後世の文運に寄與した功績は、それが縁の下の力持ち的な役廻りであるだけに、一層意義深きものがあると思はるゝ。それは、後世への影響といつたやうなことを意識し、見通しのついた目的を持つて、爲された仕事でなく、唯何とはなしに爲なくては居られない衝動から出て來たものであることは云ふ迄もないが、幼稚な時代に於ける先覺者の仕事といふものは、多くは斯うした直感的な動機から來るものではあるまいか。

書いてこゝに到る時、丸善の「學鏡」(昭和十二年十月號)を手にして、丸善社史編纂の企
があり、參考資料を求めてゐるのを知つた。直に編纂係宛に手紙を書いて、「近松著作全書」
「やまと文範」等の刊行により、近松(同時に院本)翻刻の端を開いた一項を、丸善社史か
ら逸する無からんことを希望し、「著作全書」の創意者、校訂者は何人か、「やまと文範」の
編者小野田孝吾と丸善との關係、十四年本は實在するや否等の問題を闡明することを慫慂
した。武藏屋本に關する一と通りの項目を書き終つた時に、丁度斯うしたことに逢つたの
は、奇縁であると思ふ。

武藏屋本雜俎

武藏屋本七不思議

武藏屋本の發行所には、整頓した編輯、刊行の機關が備らず、それに、餘り事務的でなか

つた民治の性格や、次から次へと起つて來たと想はるゝ雑多な障害などが手傳つて、屢々樂屋内に混亂を惹起し、刊行物の上に種々な畸形的な形態を遺した。筆者は曾つて戯れにこれ等の變態を拾つて、武藏屋本七不思議を作つて見た。

十四年本

十五年本

組合せ異同本

奥付誤付本

同版異裝本

題簽貼付本

奥付誤記本

これに「叢書番號重複本」を加へて、武藏屋本八景とするも面白からんなどゝ。

「十四年本」とは、再版以後の刊記に、その初版が明治十四年に出了ことになつてゐる

が、辻褃の合はぬ點があるので、在否を疑はるゝ「反魂香」「百日會我」「柱曆」のことであり、「十五年本」とは、近松著作全書第二冊の三篇、「重井筒」「三國誌」「姫山姥」の三篇を、後日になつて、原版の日付のまゝで、分冊して、武藏屋合本に改装したものを云ふのは言を俟たぬ。「組合せ異同本」とは、合巻の組合せが屢々變更され、或は合巻が單本となり、單本が合巻となつてゐる如き、不規則な變遷を云ふ。個々の場合に就て、組合せが變更された動機、理由等は、知る由もないが、この叢書の刊行の手順は、數版分に相當する分量の本文を、一度に印刷して貯藏し、次版を出す時には適宜に之を取出すことになつてゐたらしく、それは、合巻の各篇が各獨立した頁付を持つてゐること、同一篇の版數を異にするものゝ紙質、印字が同じであること（合巻の場合、一篇と他の篇とが、紙質を異にする爲め、一部は眞白で、他の部分は赤く焦げてゐるやうな例が尠くない）などから知らるゝ。合巻組合せの變遷は、前版の組合せの相手方が、貯藏を缺いた時、在り合はせの他の篇と取合はせて間に合はせたといふやうな、遣り繰りが主な理由であつたのであらう。

「奥付誤記本」は、讀んで字の如く奥付に誤記のある本である。そんなに數がある譯ではないが、主なるものは版數を誤つたもの、例へばその前に明かに再版、三版が出てゐるのに、それを逸して、初版から直ぐにその卷を再版と記してゐる類であり、外に前版の日付の數字を誤つてゐる（誤植かも知れない）やうなものもある。奥付の誤記は、はつきり書いてある丈に、それ文を見れば、さうした版があると思ふ外はないので、版歴研究上非常に危険な存在である。

「關八州」の第四版（二七・三・二二）には初版の日付と並べて、再版を記してある。「今宮心中」の第五次版（二八・一〇・二五、「卯月・潤色」と合卷）にも再版と記してある。この篇の前版（二五・七・？）は奥付脱落本であるからこれを版歴から除くとしても、初版から三版迄は嚴存するのであるから、この卷は少くとも第四版でなければならぬ。

「出世景清」の第六次版（二九・二・二二）の奥付は、その明かな前版を無視して、第五版とされてゐるばかりでなく、第三、四版の日付も支離滅裂な記載をしてゐる。

第五版奥付

第六版奥付

初版	二三・三・二七	二三・三・二七
再版	二三・一・五	二三・一・五
三版	二四・三・六	二四・五・六
四版	二四・七・二	二五・四・二三
五版	二五・四・一九	二九・二・二三

初、再版は二者一致してゐるから問題はなく、第三版の日付を、第六次本が五月としてゐるのは、三月の單なる誤記である。第四版も現本があるから第五版奥付所記の二四・七・二が正しい。唯第六次本が如何にして之を二五・四・二三といふ縁もゆかりもない日付に誤つたか徑路は知ることが出来ぬ。第五版は二五・四・一九の現本があるから問題なく、第六次本が、自ら「二九・二・二三、第五版」と記してゐるのは、前版の正しい第五版を逸して、第六版とすべきを誤つたのである。即ち、上記第五版奥付の記載は盡く正しく、第六次本の方は誤記が重

疊して、甚だ紛はしいものとなつてゐる。誠に迷惑至極な奥付と云はねばならぬ。

「冥途飛脚、夕霧阿波鳴渡」第二版（二五・四・二七）奥附には、初版出版日は二四・九・一〇とあるべきを、二五・九・一〇に誤り、第三版（この版は未見本であるが、「國性爺後日合戦」第一次本に誤付されてゐるこの版の奥付がある）にも同じ誤りを襲うてゐる。單純なる誤記、又は誤植である。

「國性爺合戦」再版（二四・一〇・一五）の奥付には、「戲曲叢書第五冊」と記されてゐる。叢書番號を持たぬこの篇に、何故に「冥途、夕霧」の番號が紛れて附せられたのであらうか。誤記本は他にもあるであらう。茲には氣が付いた分丈けを記して置く。

「叢書番號重複本」は、戲曲叢書第二十冊が「井筒屋源六戀寒晒、男色加茂侍」（二七・六・二一）と、「唐船嘶今國性爺、右大將鎌倉實記」（二八・三・二一）とに重複してゐるのみである。前者は近松物でないので、後者を出す時それを忘れたのである。

武藏屋本の七不思議のうち、以上は既に述べたが、然らざるものはこゝに概説した如くで

ある。奥付誤付本、同版異裝本、題簽貼付本の三項目に就ては、以下項を改めて語ることにする。

奥付誤付本

奥付誤付本は、間違つて他の巻の奥附が付いてゐる本であつて、他には餘り見たことがないこの妙な間違ひが、武藏屋本には常習犯と云つてもいゝ位、不思議に多く、座右にある丈でも左記の十九種に達する。未だ寓目せぬ何巻かの誤付本があることは容易に想像さるゝ。

目付	卷	(版)	奥付	(版)	篇名	番號
二五・八・一五	女腹切・淀鯉(二)		伊達染(四)	重井筒(五)	アリ、	ナシ、
同 九・二六	紅葉・薩摩歌(二)		曾根崎・外二(三)		ナシ、	近松叢書第一冊
同 同 同	川中嶋(二)		同		ナシ、	同
同 一〇・三	堀川・萬年草(三)		紅葉・薩摩歌(二)		ナシ、	近松叢書第九冊

二五・二一・一〇	百合若・潤色(二)	女腹切・淀鯉(二)	ナシ、	戯曲叢書第十冊
同 同 同	川 中 嶋	同	ナシ、	同
二六・三・八	大塔宮(三)浮名額(一)	最明寺 (四)	ナシ、	ナシ、
同 八・二五	國性爺後日(一)	冥 途・夕 霧(三)	ナシ、	戯曲叢書第五冊
同 九・二一	冥途・夕霧(三)	國性爺後日(一)	ナシ、	戯曲叢書第十八冊
二七・二・八	國性爺後日(三)	國性爺合戰(三)	ナシ、	ナシ、
同 同 同	氷の朝日・五十年忌	同	ナシ、	ナシ、
同 二・九	雪	女(二)	ナシ、	ナシ、
同 同 同	國性爺合戰(三)	同	ナシ、	ナシ、
同 同 同	日本振袖始(四)	同	ナシ、	ナシ、
同 四・一七	國性爺後日(五)	善 光 寺(一)	ナシ、	戯曲叢書第十九冊
同 四・二一	曾根崎・外二(四)	酒 吞 童 子(二)	ナシ、	同 第十二冊

同 同 國性爺合戦 同 ナシ、 同

二八・一一・二九 紅葉・薩摩歌(三) 善 光 寺(二) ナシ、 同 第十九冊

同 同 同 雪 女 同 ナシ、 同

誤付された奥付に、篇名を明記するものは、一見して誤付であることが判かるが、叢書番號のみがある場合は、動もすれば看過し、又は、よくあることであるから、番號の打ち違ひであらう位に考へ、況や篇名も番號も無い場合は、誤付であることに氣がつかず、その篇にさうした日付の版があるものと誤り易い。この錯誤は、誤付された奥付が、再版以下のものであると、その刊記によつて、初版迄の日付に溯つて、混亂を重複する危険がある。その篇の前後の版と、その日付が判明して居れば、誤付の發見はまだしも容易であるが、それ等の資料を缺いで、眞實に誤付本に打突かつた場合は、それが誤付であることを知ることは困難であつて、最も注意を要する。

斯かる頻々たる奥付誤付は、如何なる徑路から起つたのであらうか。一度や二度でない丈

けに、何か共通の、起り易い動機から起つたものであらう。最も想像され易い場合は、同一時期に用意された二巻の間に、誤つて奥付が入れ替つたとすることであるが、上記の資料の範圍内では、直接に二巻の間に奥付が交換されてゐるのは「國性爺後日」の初版（實は第二次本）と、「冥途、夕霧」の第三次本との間に起つた一例があるのみで、却つて甲乙巻共に、甲又は乙巻の同じ奥付を持つてゐる例が、誤付本の大部分である。その中でも、「隅田川」再版の奥付は、正しいその巻と、「雪女」第二次版、「國性爺合戦」第三次版、「日本振袖始」第四次版と、都合四種の巻に同じものがついてゐる如き例すらある。

その巻には他の巻の奥付が付せられ、本來のその巻の爲めの奥付が、他の第三の巻に通つてゐる例としては、「伊達染（四）、重井筒（五）」の奥付を持つ「女腹切、淀鯉」再版の奥付が「百合若、潤色」第二次版に付せられ、「會根崎外二篇」三版の奥付を持つ「紅葉、薩摩歌」再版の奥付が、「堀川、萬年草」第三次版に付せられ、「隅田川」再版の奥付を持つ「國性爺」第三版（この奥付には再版と記してあるが、前に出てゐる正しい再版があるから三版の誤り

である)の奥付が、「國性爺後日」に附せられてゐる如きがあるが、依然として或一種の奥付は二卷に重複してゐるのであるから、相互交換の例にはならぬ。

或卷の爲めの奥付が、二卷、又は四卷に對する分量だけ印刷され、他の一卷、又は三卷の奥付は全く用意されぬと云ふことは、間違ひであるとしても、どうした間違で起り得るのであらうか。この何卷かに付いてゐる奥付は、明かに一度に印刷されたものであつて、同じ内容のものが、組版を改めて、別に印刷されたものではない。

奥付誤付本が発行された時期は、大體に於て、その奥付にある日付に近いものであると推定して差支ない。同一時期の出版であるから、斯る間違が起つたと考へる外はないからである。國性爺後日」第三次版にある「國性爺」第三次版の奥付と、その「國性爺」第三次版に付いてゐる「隅田川」再版の奥付とが、前者は二七・二・八であり、後者は二七・二・九であるのが、その適例である。

奥付誤付本が、正しい奥付を持つ二版の中間に挿まれた場合は、誤付本は版數の計算から

除かれて、無籍本となつてゐる。これは取扱上當然斯うなるものと思はるゝ。女腹切、淀鯉「百合若、潤色」「雪女」の三卷は、孰れも第二次版が誤付本で、第三次版が再版となつて居り、「紅葉、薩摩歌」は第二次版と第四次版が誤付本で、第三次版が再版となり、「振袖始」は第四次版が誤付本で、第五次版が四版となり、「國性爺後日」は、第一、三、四次版が誤付本で、第二次版が初版、第五次版が再版と記されてゐる。その他の誤付本は、寓目した限りではそれが最終版であつて、あとに續く版が無いから、無籍本であることがはつきりしないが、若し後續版があつたら、版數の勘定を飛ばさるゝ筈であるから、結局誤付本は全部無籍本である譯である。

誤付本は、筆者の寓目したコピーのみがさうであつて、その版の他の卷はさうではないのではないか、そこらに在つた或る版の一部のみに、他の卷の奥付が紛れて付けられたのではないか、その疑ひは、一應持たるゝのであるが、その版が無籍版にされてゐることから、さうでは無しに、その版の全般が誤付本であつたことが證明さるゝ。

奥付誤付本に欺かれて、版歴探求の途上でまごまごした例は數ふるに暇がない。今その二三の思出を誌すのも、後來者の爲めに何等かの参考になるかも知れない。

「百合若、潤色」は最初に見たのが、第二次版の誤付本で、その奥付は「女腹切、淀鯉」再版の分であることが、あとで判かる迄は、その奥付にある

初 版 二五・一・二九 再 版 二五・一・一〇

戯曲叢書 第十冊、

といふ刊記を「百合若、潤色」のものであると思つてゐた。

一方、「女腹切、淀鯉」は、これも最初に見たのが、第二次版の無籍本で、この奥付は「伊達染四版、重井筒五版」と、篇目が明記されてゐるので、誤付であることは分つたが、その刊行の期日は、誤付された奥付によつて、廿五年八月前後であつて、それがこの巻の初版であると思つた。即ち、

百合若・潤色 初 版 二五・一・二九 叢書 第一〇冊

女腹切・淀鯉 同 二五・八・？ 同 第一四冊

といふのがその時の推定で、後者を叢書第十四冊としたのは、この巻に當て籤まる番號は他に無く、それから、その前後の、叢書第十三冊の「川中嶋」が廿五年六月であり、第十五冊の「八百屋お七、二河白道」がその九月に出てゐるので、八月のこの巻を第十四冊とすると、丁度番號と日付との辻褄が合ふのであつた。後に二卷の正しい初版を見るに及んで判明したその版歴は、番號も日付も逆になつて、

女腹切・淀鯉 初版 二五・一・二九 叢書 第一〇冊

百合若・潤色 同 二五・七・一九 同 第一四冊

であること言を俟たぬ。

今にして思ふと、「戀寒晒、加茂侍」の後付に「女腹切、淀鯉第十冊、百合若、潤色第十四冊」と記し、「善光寺」初版の後付には「百合若、潤色、廿五年七月初版」と、孰れも正しい記載があるのを、先入主に支配されて、例の後付書目の誤記であらうと軽く看過してゐたの

であつた。

「冥途、夕霧」三版の奥付を持つ「國性爺後日」(第一次版、二六・八・二五)からも、生憎この版を先に見たので、色々な錯誤を與へられた。この奥付には篇名が無く、唯「戯曲叢書第五冊」と、「冥途、夕霧」の番號が記されてゐるのであるが、それは次に記すやうな解釋を下して、誤付であるとは思はなかつたのであつた。

即ち、「國性爺後日」はこの二六・八・二二の日付がある第三版がある以上は、そのあとに出た初版と記してある版(二六・九・二一)は、事實上の第三版でなければならぬ。同時に、三版迄は誤つて叢書番號を「冥途、夕霧」と重複して第五冊とし、あとで氣がついて、事實上の第四版と考へらるゝ版からそれを訂正して、その時の新番號たる第十八冊を之に引宛てた。その爲めに第四版であるべきを更めて初版とした、と云ふのがその解釋であつた。

この奥付が、實は「冥途、夕霧」三版のものであることが判つて見れば、「國性爺後日」は、初版を記した版の前に、三版までであるとしたことや、叢書番號が途中迄重複して、後に訂正

されたとしたことなどは、あとかたもなく霧消したことは勿論である。

この「國性爺後日」は、五版中の三版迄が奥付誤付本であること上記の如くであつて、その誤付奥付に欺かれた徑路が判明した後も、版歴が混雜してゐて難解であるから、特に解説する要がある。その五版とは左の通りである。

二六・八・二五 「冥途、夕霧」 三版の奥付あるもの、

二六・九・二一 初版

二七・二・八 「國性爺」 再版？ の奥付あるもの、

二七・四・一七 「善光寺」 初版の奥付あるもの、

二八・一〇・二七 再版

この中で判らぬのは、二七・二・八日付の第三次本に付せられてゐる「再版」と記した奥付であつて、その刊記は左のやうになつてゐる。

二四・一・一九 印刷（初版）

二四・一・二〇 出版(同)

二七・二・四 再版印刷

二七・二・八 同出版

(篇名、叢書番號無し)

この初版の印刷、出版の日付は正しく「國性爺」のそれであつて、他にこの日付で初版を出したものは無い。處が、その「國性爺」は二四・一〇・一五に出た再版があつて、上記の奥付にある再版印刷、出版のと一致せぬ。

同時に「國性爺」の再版の奥付も、その初版の日付が併記されてゐるので、他の卷の奥付が誤付されてゐるやうな、紛はしいものではない。唯妙なことには、この奥付には「戯曲叢書第五冊」とこの篇に由縁の無い叢書番號が記されてゐる。この誤記が他の錯誤を誘致したのではあるまいか。

とに角、この「國性爺後日」第三次本に付いてゐる奥付は「國性爺」三版に對するもので

あつて、それが誤つて前に再版が出てゐるのを逸して、この版を初版に續いた再版と記し、再び誤つて、それを「國性爺後日」の第三次版に付けたものであると思はるゝ。

「國性爺」の第三次本には「隅田川」再版の奥付が誤付されてゐるが、その日付が、二七・二・九であつて、上記の「國性爺後日」に付いてゐる奥付の日付二七・二・八と一日の差があるのみである。それから「善光寺」初版の後付に「國性爺合戦、二七・二・再版」とあつて第三次本を、再版に誤つた痕跡を残してゐる。

以上の複雑した錯誤を綜合すると、次のやうになる。廿七年二月には三卷の武藏屋本が出された。「國性爺」第三次版、「國性爺後日」第三次版、及び「隅田川」再版とがこれである。

(別に「雪女」再版もこの月に出てゐるが。)處が、「國性爺」は三版を再版に誤つて奥付が作られ、それが誤つて「國性爺後日」に付けられて、その「國性爺」には「隅田川」の奥付が誤付された。といふのがその経緯である。この間違ひの三重奏は、武藏屋本名物の奥付誤付本の中でも、最も手の込んだものである。

斯くして、誤付本が出来る徑路はつきりしない。上記の外にもまだありさうに思はるゝ、誤付本が幾卷か現はれたら、その間の消息が分かるかも知れない。

同版異裝本

武藏屋本の装幀は、終始一貫して、向イ鳳凰丸の紋散らし、中央に短冊形の題簽がある同じ形式であるが、地紙、紋様、題簽、題字等の色は、原則として篇毎に、又版毎に取替へられて、色彩の組合せの變化により、千紫萬紅、とりぐの美しさを持つてゐる。同じ篇で改版に同じ色彩を用ひてゐるものが、稀に無いではないが、改版毎に變はるのが原則で、色彩の異同によつて、版の異同を識別する便宜がある。處が、こゝに同じ奥付を持つて、全く同版であり乍ら、異つた表紙を持つてゐる數種の版がある。筆者が寓目したものは、左記の十七種であるが、奥付誤付本や、題簽貼付本と同じく、寓目したものは、一部分のみであつて、他にも未だ何卷かあるのであらう。

本朝三國誌	初版(改装本)	二二・一二・二?
女楠	初版	二三・八・二八
姫山姥・重井筒	再版	二三・一〇・一一
百日會我	五版	二四・四・二三
十二段	五版	二四・六・二五
又は氷の朔日・歌念佛	初版	二四・一〇・三一
長町女腹切・淀鯉出世瀧徳	初版	二五・一・二九
酒呑童子	初版	二五・四・一二 (三種)
出世景清	五版	二五・四・一九
川中嶋合戦	初版	二五・六・八
百合若・潤色	初版	二五・七・一九 (五種)
三世二河白道・八百屋お七	初版	二五・九・一一

最明寺殿百人上臈 四版 二六・三・八

隅田川 再版 二七・二・九

酒呑童子 再版 二七・四・二一

日本振袖始 四版 二八・一〇・八

天鼓・吉岡染 初版 二九・一・一〇

以下これ等諸本の装幀の異同を略記する。

「本朝三國誌」は、例の「近松著作全書」第二卷を分冊、改装した版であつて、異装と云ふことは當らぬが、奥付の様式に二種あること前に記した如くである。「全書」の分冊、改装が二回に行はれたのである。(「重井筒」の、奥付に枠があり、「賣捌所叢書閣」の記入がない第一回分冊と思はるゝ分は、未だ寓目せぬが、必ずある筈である。唯「姫山姥」の奥付は、例の「全書」の奥付そのものであるから二度に作られた分冊本は、全く見わけがつかぬ同一形式である筈である。)

女禰」初版、向イ鳳凰丸の紋様白抜、題簽白抜、文字黒、表紙綠色、甲はやゝ濃く、乙は淡きも、その差著しからず、題字、上半の題名は同筆同刻であるが、下半の二行に記した「近松門左衛門作」「武藏屋版」の文字が、甲は肉太で畫大きく、乙は肉細で小字、明かな異版である。

「ゑん山姥、重井筒」再版は三種の異本がある。褐色の表紙、紋様と題簽白抜、黒字、上に二行に列べたる題目迄は、三本全く同一であるが、下の「近松門左衛門作」「武藏屋版」の、二行の文字が、甲は巾廣で楷書に近く、乙と丙とは草書體であつて、乙は巾廣、丙は巾狭で、明かな相違がある。

「百日會我」五版、表紙薄黃藤色、紋及び題簽白抜で共通、題字も同筆、同刻と見ゆるのに、甲は黒字、乙は赤字である。

「十二段」五版、甲は黃色、紋白、題簽白、題字黒、乙は青、紋赤、題簽赤、題字白である。

乙本の表紙は、前版の第四版と全く同じである。四版の表紙の残りがあつたのを、第五版の一部に使用し、不足分を新に用意したものか、同版異装本が出来ると一つの場合を暗示する。

「又は氷の朔日、歌念佛」初版甲は表紙灰色、紋様白抜、乙は卵黄色紋様褐色の「近松時代淨瑠璃」の表紙を轉用した貼付本である。合本「時代淨瑠璃」四巻のうち、最初の第一巻が出たのは二七・四・二五であつて、この巻の日付二四・一〇・三一の時代に利用されたその表紙がある譯はないから、この貼付本は實際は二十七年以後に出たものであらう。處が斯く解するも初版二種のうち、甲は日付通り、廿四年に出、乙は廿七年以後に出て、その中間に、再版（二五・四・二八）が挿まつてゐることになつて、經過の説明が頗る困難になる。不可解な版である。

「酒吞童子」初版、甲は表紙灰色、紋及び題簽白、文字黒、乙は表紙水色、紋白、題簽は濃き赤色で、題字は白抜である。題字、一は黒、他は白抜の虚字であるから、別刻である事は

問題ないが、文字は一畫の差もなく、同筆であると思はるゝ。

白の題簽に赤文字を用いたものは、他に數卷を見るが、題簽を眞赤に塗り潰したものはこの卷と、前に記した「十二段」五版位のもので、概ね穩健な色を用ひてゐる武藏屋本にしては、思ひ切つた派手な或は珍らしく下品な色の使ひ方として目立つてゐる。

「川中嶋合戦」初版、甲乙共に茶系統の表紙、題簽白、黒文字の同刻であるが、紋様、甲は白抜、乙は黒色である。

「百合若、潤色」初版、この版には、必しも異装とばかりは云へぬが、明かに五種の異版がある、その異同を表示すると次の如くである。

	(表紙)	(紋)	(題簽)	(題字)	(夕霧補文)	(發見報告)	(角書)	(書體)
甲	鼠	黒	鼠(黒粹)	黒	アリ	完璧	おとをひ	A
乙	同	同	白	同	同	同	同	A
丙	同	白	同	同	同	同	あとをひ	B

丁	同	同	同	ナシ	完璧。	同	B
戊	同	同	同	ナシ	安壁。	同	A
(第二次本 誤付本)	同	同	(同)	(同)	(同)	(同)	(B)

「夕霧補文」とは、「夕霧」の前版に缺文があつたのを、この時完本の發見により、缺文に當る頁丈けをこの卷に添付したものである。「發見報告」とは、多年探求に苦心した「夕霧」の完本と「潤色」とを發見し得た報告文であつて、文中「完璧」とあるべきが、或者は「完璧」となり、他は「安壁」と誤つてゐるものがあるを云ふ。「角書」とは、表紙の「卯月の潤色」の角書に「あとをひ」とあるべきを、一部「おとをひ」と錯つてゐるのである。題字一見同筆と見ゆるが、仔細に比較すると、二三の書(例へば百合若の、合字の撥ね)に小異があり、それが自ら二種に分かれてゐる。今この四種の初版を併べて、その異同を比べて見ると、自ら移り變りに順序があつて、それ等の版が出た経路が判る。甲と乙とは表紙の地の色、紋様、題字、補文があること、報告文が「完璧」になつてゐること、角書が「おとをひ」であることな

ど、すべて共通であつて、唯前者は題簽が地と同じ鼠色で、黒枠が取つてあり、後者は白抜であることだけが異つてゐる。

乙と丙との違ひは、紋様が前者は黒であるのが、後者は白抜となり、「おとをひ」が「あとをひ」に訂され、書體がAからBへ變つてゐる。補文があること、「完璧」であること等は、同様である。

丁と戊とは、題字の書體が、一はAであり他はBである小差がある外、外形は殆ど見分けがつかぬが、内容の文字の上で、丁の「完璧」であるのに對して、戊は「安璧」に變つてゐる。明かな異版である。

即ち、甲乙二本は、角書が「おとをひ」に誤まられて、丙以下それが正されてゐる點、紋様がこの二本が黒で、丙以下白抜に變つてゐる點、書體がA種である點などから見て、この二本は續いて最初に出たものである。而して、甲は題簽が獨り黒枠で仕切つた地色であり、乙は白抜で、それ以下に繼續してゐるから、甲が先で、乙がこれに續いたものと思はるゝ。

丙は補文があること、「完璧」であることが甲、乙に共通で、丁及び後版と異つてゐるから、これが乙に續いた版であると知られ、丁戊はそのあとに出た無籍本と全く同一装幀であるばかりでなく、補文が無くなつてゐることが共通であるから、初版同本中の最後のもののであることが判かる。

「最明寺」四版、(單本)甲は表紙濃黄色、紋様白抜、「今宮、最明寺」の表紙を利用した貼付本、乙は同じ貼付本であるが、淡卵色、褐色紋様の「近松時代淨瑠璃」の表紙を利用したのである。甲がその日付で先づ出で、乙は「近松時代」の合本が出たあと、廿七年以後に出たものであらう。

「隅田川」再版、紋、題簽が白抜であること、黒字であること、その文字が一畫、一點の相違もないこと等、二本は全く同一形式であるが、表紙の色が、一はやゝ濃き綠色であつて、他は目がさむるやうな明るい卵黄色である。

「酒吞童子」再版、甲は白色、紋赤、題簽は白の地色に黒の二重枠、黒字であつて、乙は卵

色、紋白、題簽白、黒字である。文字は同筆異刻か。「酒吞童子」は初版にも異装本があること、上記の如くであつて、二年を隔て、同じ篇に再び二種の再版が作られた譯であるが、それは別に因縁があるとも思はれぬ。

「天鼓、吉岡染」初版、甲は白表紙、紋蒔黄、題簽は地色に黒の二重枠で、黒字、乙は表紙卵色、紋は褐色、題簽白、金銀の枠（この表紙は「近松時代淨瑠璃」を流用したものである）がある。題字は「傾城吉岡染」「天鼓」と、甲本とは逆の順に併べて記されてゐる（本文の排列は甲乙共に天鼓、吉岡染の順である）。武藏屋本の末期に出たこの篇は、云ふ迄もなく、甲本が先づ出て、本文の殘部に、これも在り合はせた「時代淨瑠璃」の不用の表紙を間に合はせて、閉店間際に出たと思はるゝのが乙本である。外にも例があることではあるが、貼付本の見すばらしさと云ひ、題目の排列を誤つてゐることゝ云ひ、斷末魔の混亂と焦燥とが、この一卷に現はれてゐて、そゞろに哀愁をそゞるものがある。

同版異装本が作られた動機はどうしたことであらうか。同じ初期の翻刻院本である金櫻堂

本（名作三十六佳撰）にも數種の同版異裝本がある。いづれも初版で同じ日付の奥付を持つてゐるが、似ても似つかぬ全く異つた意匠の表紙が付けられて居つて、中に「一谷嫩軍記」の如き、三種迄の同版異裝本が、家藏中だけにも見出さるゝ。この叢書は、事實上の改版毎に、違つた装幀をされたのであらう。而してその發行者に、版歴といふ概念がなく、重版の際は、無造作に初版の通りの奥付を作つて添付したものの様である。

卅五年頃に出た數篇に第五版がある。その奥付は孰れも初版から直ぐに五版になつてゐる。案ずるに各篇の再版から四版迄は、上記のやうに初版名義で通して來て、この時出版法規が變つたか、初版重出の不合理が判つたか、等の動機から、急に第五版としたものであらう。果して然らば、各篇は各四種づゝの初版異裝本がある譯で、蒐集の興味をそゝるものがある。

武藏屋本の場合は、最初から版歴の概念があつて、錯誤が無い限り初版、再版と正當に整理されてゐるのであるから、その同版異裝本に、金櫻堂本流の「無造作初版」説は當て箴ら

ぬ。況や異装本が再版以下のものである場合は、猶更この假説は成立たぬ譯である。

想像さるゝ異装本發生の動機は次の場合の孰れかであり、或はその幾つかの場合であらう。

(一) 武藏屋本は、何版分かに相當する分量の本文が一度に印刷されて貯藏され、重版の際は新に表紙と奥付とが用意されて出來上ることになつて居たことは既記の如くである。處が、或時は武藏屋獨特の準備上の手違ひから貯藏さるゝ分に對する奥付が、本文と一緒に印刷されて了つて、重版の際は、表紙のみが新しくされた。この想定は最も可能性があるやうで、「百合若、潤色」初版の四種、「姫山姥、重井筒」再版の三種等は、これに當るやうに思はるゝ。

(二) 前版の表紙の残りがあるのを、次版の一部に用ひ、不足分を新に用意さるゝ場合、大部分は新しい表紙であつて、一小部分に前版の表紙の残つたのを、勿體ないから使ふといつた様なことであらう。前に記した「十二段」五版二種のうち、乙本の表紙が、第四版と全く

同じであるのがその例である。

(三) 前と反對の場合、前版の際、準備上の齟齬から、表紙が不足して、本文が残つた。(この場合の本文には云ふ迄もなく前版の奥付がついてゐる。)重版の際、これが新版の表紙を以つて、新版と一緒に上市される。「酒吞童子」初版の甲と再版の甲、「百合若、潤色」の丁と、次版(奥付誤付本)などが、どうやらこの例に當て箝りさうである。

以上の二つの假説は、孰れも出版準備の際、本文と表紙との部數が一致せずに、その孰れかゞ残つた場合、次の版を出す時に、前版か後版かの異本が出来るとする想定であるが、これもありさうに思はるゝ。

(四) 金櫻堂本の場合と同じやうに、重版の際、前版の奥付をそのまま印刷したとする場合。唯金櫻堂の場合は、さうするものだと思ひ、武藏屋の場合は、さうではないが、偶々放心的な不用意から、さうして仕舞つたと解するのである。しかし乍ら、異装本の奥付は多く同版であると見られ、斯の假説に當て箝まる實例としては改装本の「本朝三國誌」があるの

みである。

以上のやうに考ふると、同版異装本と云つても、それは同じ日付の奥附を持つてゐるといふ文であつて、必しも同時に出版されたものではない。特に假説(一)と(四)との場合は、完全に獨立した一版である筈であるが、今それを明かにする術はない。

題簽貼付本

表紙に題簽を貼りつけてある武藏屋本が、筆者の知つてゐるだけで、左記の十六種ある。これだけがその全部でないだらうと思はるゝことは、奥付誤付本や、同版異装本と同じである。貼付本は孰れも他の篇の爲めに用意されて、何等かの部分で、不用になつた表紙を、流用したものであつて、透かして見ると、下に印刷されてゐるものと題目が讀まるゝ。同じ變態本であるが、誤付本や異装本と違つて、これは間違つて出來たものではない。

卷 版 日付 單表紙 摘要

本朝三國誌 初 一五・四・二九 鎗權三・十二段 「近松著作全書」第二冊を分冊改装せるもの

重井筒 同 同 同 同

姫山姥 同 同 同 同

双は氷の朔日・五十年忌 初乙 二四・一〇・三一 近松時代

今宮心中 四次 二五・七・? 近松世話(元祿寶永)

奥付を缺く

川中嶋合戦 二次 二五・九・二六 曾根崎・外二 曾根崎外二、三版奥付

同 二五・一一・一〇 近松時代 女腹切・淀鯉再版

最明寺 四 二六・三・八 今宮・最明寺

同 同 同 近松時代

大塔宮・浮名額 三次 同 近松世話(元祿寶永) 最明寺四版奥付

雪 女 二次 二七・二・九 近松世話 (寶永) 隅田川再版奥付

同 三次 二八・一一・二九 同 (同) 善光寺再版奥付

紅葉・薩摩歌 三次 同 近松時代 善光寺再版奥付

天神記 同 同 (寶永) (寶永)

善光寺再 同 近松世話 (寶永) (享保)

吉岡染・天鼓 二次 二九・一・一〇 近松時代 同版異裝本

「三國誌」「重井筒」「姫山姥」の所謂初版と稱する巻が、實は「近松著作全書」第二卷の分冊改裝本であること、不用になつた原表紙が出来て、それがこれ等の巻に流用さるゝに至つた徑路、改裝の時期等に就ては既に記した如くである。この三卷は原裝がさうである爲め、後の武藏屋本に比し、縦横が少しつまつて、小形になつてゐる。

「今宮心中」第四次本(表紙には「今宮」のみの題目があるが、内容は「潤色」が添付されてゐる)は奥付を缺いでゐる。この版全般がさうであるか、家藏の巻のみであるか明かでない。

いが、裏表紙が完備してゐて、後に脱落したものと見えぬ。卷末に「辰年七月」の日付がある報告文があるから、その頃に出たものであらう。原表紙の「近松世話浄瑠璃」(自元祿十三年至寶永七年)は、二五・四・八に出てゐるが、その表紙と、「今宮」に轉用されてゐるものとを比較すると、題字は同筆同刻、地色は淡灰色で、現本の分は黄味、流用の分は少しく青味を帯びてゐる小差があり、紋様と題簽の枠が、前者は黒褐色、後者は銀で、これは全く異つてゐる。合本は時代、世話共に重版が出た形跡は無いから、廿五年七月頃、再版を出さうとして、何等かの都合で中止になつて、この不用表紙が出来たのであらう。

「川中嶋」二次版は、「曾根崎、外二」の表紙を用いたもので、地色緑、紋様と題簽白抜、題字黒色のこの表紙は、その「曾根崎、外二」の第四次本(二七・四・二一)に用ひられてゐるものと全く同じものである。この「川中嶋」と同じ二五・九・二六付で出た筈の「曾根崎、外二」の第三版(「川中嶋」二次本と、「紅葉、薩摩歌」二次本に誤付されてゐる奥付による)は、未見本であるが、必ずこの緑色の同一様式の表紙であらうと思はるゝ。即ちこの表紙は、同

時に出たその篇の三版を「川中嶋」二次本に用ゐられ、更に残つた分が第四次本に用ゐられたと思はるゝからである。「川中嶋」二次本は、表紙も奥付も共に「曾根崎、外二」のものになつてゐる不思議な版である。

「最明寺」第四版の表紙は、濃き黄色、紋様と題簽白抜、貼紙の下には黒字で「今宮の心中、最明寺殿百人上臈」の題號が讀まるゝ。この篇は初版から三版迄「今宮」と合卷であるが、こゝに使はれてゐる表紙は、その孰れの版のものでもない。廿五年四月、この組合せの三版を出した後、その七月頃更に第四版を出さうとして何等かの故障（在る積りだつた「最明寺」の本文の貯藏が無くなつてゐることを發見したといふ如き）によつて、頗かに模様換となり、「今宮」のみを離して刊行（表紙の題目は單目で、實質は「潤色」を添付してある版、奥付を缺ぐ）した、とでもいふやうな経緯があつて、中止された合卷第四版の爲めに用意されたのがこの表紙なのであらう。翌廿六年三月、切離された「最明寺」を單行するのにこの表紙が流用されたのである。

「大塔宮、浮世額」には、「最明寺」四版の奥付が付いてゐるから、廿六年三月頃の版であらう。用ゐられてゐる表紙は、「今宮心中」第四次版と同じ。「近松世話浄瑠璃」(元祿・寶永)のものである。

「雪女」第二次本には「隅田川」再版の奥付が誤付されてゐる。表紙は「近松世話浄瑠璃」(自寶永七年至享保七年)の分が用ゐられてゐる。この銀紋様、銀枠の表紙は、「今宮心中」「大塔宮、浮世額」に用ゐられた同じ。「近松世話浄瑠璃」の「元祿・寶永」の分と全く同一様式である。同じ時期に同じ動機で作られて、同じ理由で不用となつた表紙なのであらう。

「紅葉、薩摩歌」三次本には「近松時代浄瑠璃」の表紙が使はれてゐる。卵黄色、紋様と題簽の枠は褐色で、廿八、九年に出版された合本二巻の現本の表紙に似てゐる。現本の表紙の餘剰であるのか、別に用意されて不用になつたものであるかは明かでない。

「善光寺」再版には「雪女」二次本と同じ。「近松世話」(寶永、享保)の表紙が流用されてゐる。

「吉岡染、天鼓」は、例の初版の異装本であつて、表紙は「紅葉、薩摩歌」三次本に用ゐられてゐるのと同じ「近松時代」である。

以上を通観するに、題簽貼付本が出たのは、廿二年に三種、廿四年一種、廿五年三種、廿六年三種、廿七年一種、廿八年四種、廿九年一種であつて、随時にこの手段は用ゐられ、或時期に偏してゐるのではない。

貼付本が出来る動機として、想像さるゝ最も主なる場合は、中途迄用意された卷（多くの場合は合卷）の出版が、何等かの都合で中止されて、不用の表紙が出来たのを、他の卷に流用するのであると思はるゝ。廿二年末に出たと思はるゝ、十四年日附の三本、「今宮、最明寺」は初版から三版迄この組合せであるので、四版もその積りで、表紙が用意されたのが、不用になつて、「最明寺」四版の單本に利用されたと思はるゝ如きがその例である。

「川中嶋」の項に記した場合は、想像さるゝ貼付本發生の第二の動機であらう。この場合は、悉らく又しても、何等かの手違ひによつて、必要以上に多量の表紙が出来上つて仕舞つたの

で、その一部を貼付本として他の巻に流用したのである。「紅葉、薩摩歌」と「吉岡染、天鼓」とに用ゐられてゐる「近松時代浄瑠璃」の表紙も、この例に屬するのであるのかも知れぬ。

十四年日付の三本は別として、他の貼付本十三種の中、奥付誤付本六、奥付脱落本一、同版異裝本一があつて、正しいその巻の奥付を持つてゐるものは、僅かに五卷あるのみである。題簽貼付といふ異例な取扱の爲めに、餘計な混雜が起つて、奥付誤付その他の錯誤を生じたのか、もと／＼貼付本は、樂屋の繰廻しが苦しい時期に苦しまぎれに出來たものと思はるゝので、さうした場合に於ける事務的、精神的混亂状態が、同時に奥付誤付等の混雜を伴うたか、孰れにしても何等かの連關した原因から發生したもので、偶然では無ささうに思はるゝ。それにしても、假令稀に不用になつた表紙が山積されてゐても、その事のみが理由で、貼付本となるとは限らぬ。出版物には出來る丈け意匠を凝らし、手数をかけて、彌が上にも立派な装幀をし度いことが、出版者としての人情でもあり、賣物に花を飾る商賣的な要求でもある。經濟的の不如意から來る已むを得ない結果に外ならぬ貼付本を作らねばならぬこと

は、民治としては、泣いても泣き切れない思ひであつたのであらう。それほど貼付本は、見た目が如何にも貧弱であつて、武藏屋本刊行の、血の出るやうな苦心を物語る深刻な遺物の一つである。

發 兌 元

武藏屋本の發兌元、又は發賣所等の名目で、奥付に列ねられた名には、左記のやうな數次の變遷がある。

(一)、武藏屋本の第一本「天智天皇」初版(二二・一〇)、第二本「十二段」初版(二二・一)には、「翻刻兼發行者」として早矢仕民治の名が、印刷者松本秋齋と併んでゐるのみである。尤もその後「賣捌書肆」「市内大賣捌」として、五六の書肆名が列記されてゐる。この賣捌所名は、後年になつて、名古屋、京都、大阪、神戸等に亘つて、次第に増加してゐるが、これは讀んで字の如く取引員であつて、出版には關係ないのであらう。唯第二本奥付の賣捌

書肆中に、丸善、中西屋の名が注目を惹く。第三本「日本振袖始」初版（二二・二二）には、早矢仕、松本の名の次に、發賣所として、叢書閣、丸善商社書店（日本橋通三丁目）、盛春堂（本郷元富士町）と記し、賣捌書肆の名は無い。以上の如く、第一期の二十二年本の發兌元の記し方は未だ一定してゐない。

（二）、二十三年一月「天智天皇」再版以降、翻刻兼發行者早矢仕民治、印刷者松本秋齋の次に「發兌元武藏屋叢書閣」と記され、この記し方は、翌廿四年一月まで續いてゐる。

（三）、二十四年一月の「國性爺合戦」初版から、發兌元に丸善書店が加はつて、丸善、武藏屋の順に並んでゐる。この様式は大體に於て、廿六年三月に至つてゐる。

唯この間に在つて、廿五年一月の「關八州」三版には、東京丸善の名が無く、叢書閣の次に同じ發兌元として、丸善書店（大阪心齋橋筋北久寶寺町）の名がある。

（四）、廿六年四月、「一心五戒魂」初版から、發兌元、丸善、武藏屋の次に中西屋（神田區表神保町二番地）が加はつて、廿九年二月の最後に迄及んでゐる。

丸善及び中西屋の名は、初期の分から賣捌書肆の連名中にあるものである。その丸善が廿四年一月から、中西屋が廿六年四月から、特に發兌元に場所を移してゐるのは、この時期から出資關係を生じたか、何等かの變化を生じたものであらう。

賣捌書肆には「天智天皇」再版（二三・一）から横濱丸善書店（辨天通二丁目）、「柱曆」再版（二三・三）から大阪丸善書店（心齋橋筋北久寶寺町）の名が加はつて最後に及んでゐる。それから叢書閣と關係があるかないか不明であるが、多分別箇のものだらうと思はるゝ武藏屋といふ名があつて、第二本たる「十二段」初版（二二・一）に現はれて、最後迄續いてゐる。最初は「神田錦町」とあり、廿五年三月頃の諸卷に「神田表神保町」となり、翌四月には「錦町」に歸り、五月の分には「錦町一丁目」とあるのが、十一月、十二月頃の數卷に「錦町三丁目」と記し、二十四年一月から再び「一丁目」となつて、最後に至つてゐる。表神保町及び錦町三丁目は誤記であるか、事實移轉したものか明かでない。名が武藏屋であつて、内容が判らぬ丈けに、氣になるから記して置く。

印刷所

三村清三郎氏の「本の話」に「僅の資本にて同じ町の活版屋を頼み、近松もの、珍しきものを、片はしより一部宛翻刻して出したり」と書いてある。この記事は、淀橋常圓寺に於ける魯庵氏の講演を聽いて書かれたものであるので、高野辰之、山口剛氏のその講演の記録には、さうした印刷所に關する記述はないが、多分魯庵翁がさう云はれたのであらう。しかし乍ら、その「同じ町の活版屋」といふのは大づかみな云ひ方であつて、武藏屋本の奥附を見れば、簡單にわかるやうに、その印刷所は本郷區湯嶋一丁目十三番地の松本秋齋であること言を俟たぬ。この湯嶋一丁目十三番地は、武藏屋の神田宮本町五番地と同じ並びで、神田明神の入口を挿んで、一丁もない場所にあるので、大雑端には「同じ町」といつてもいい場所であつた。

この松本秋齋といふのは、どんな印刷屋であつたか、知る由もないが、いづれ武藏屋に相

應した貧弱な活版屋であつたのであらう。廿二年の第一本「天智天皇」初版から、廿九年の最終巻「天鼓・吉岡染」初版、「出世景清」六版、「雪女」三次本まで、殆どこの印刷屋で一貫してゐるのであるが、僅に途中で左記の數卷丈が、別な印刷所になつてゐる。(参考の爲め、院本以外のものも、目についただけ記して置く)。

二三・三 柱 曆 再 版 廣 瀬 安 七(製紙分社) 日本橋兜町一

同 同 出世景清 初版 同 同

二四・一 好色一代男 嶋連太郎(秀英社) 京橋西紺屋町二六

二四・二 心中二つ腹帶 關 恒次郎 神田表神保町一
末廣十二段

二四・五 雪女 初 版 三 井 駒 治 京橋弓町二四

二四・六 傾城買二筋道 同

二四・一 生玉心中 油地獄 初 版 同

廿三年の四月以降、及び廿四年を通じて、この期間は、各篇の初版、重版が續出してゐる時期であるが、上記の數卷を挿んで、その前後に出てゐるものは、皆松本秋齋であつて、その間を縫うて、飛びくりに違つた印刷所が利用されてゐるのは、どうした事情であつたのであらうか。

とりくゝの色彩の變化によつて、武藏屋本を美裝した向イ鳳凰丸紋散らしの表紙は、松本秋齋の印刷したものか、他の印刷屋の手に成るものか明かでない。表紙の題簽に書かれた表題は終始同筆で、感じのいゝ筆蹟であるが、その筆者も何人であるかを知らぬ。

古本屋に於ける武藏屋本

こゝ數年、古本屋の店さきで、武藏屋本を見ることが、ほとんど無くなつた。神保町あたりの、軒並の古本屋が、文藝、經濟、機械、電氣、化學に至る迄、最も普及的な本を、一と通りは並べなければならなくなつたこと、早いことを争うて、新刊書を置くやうになつたこ

と等の傾向から、どの店もどの店も、同じやうな通り一遍の本が、同じやうに並べられて、一軒々々の、特色とか、個性とか云ふものが無くなつた。ある本はどの店にもあり、無い本は何處にもない。澤山の部門の本を普遍的に並べねばならぬといふことは、店さきの棚の容積に限りがあるから期せずして、話し合つたやうな、劃一的な並べ方にならざるを得ないのである。東京堂、三省堂では金を出しても獲られない、掘出しものと云つても、一部何百、何千金に値する稀本を、何錢均一の瓦羅苦多本の山から拾ひ出さうといふさもしい了簡ではない。多年探求して已まなかつた本を、ゆくりなくも棚の一隅に発見して、心のときめきを覚えさす意味での掘出し物を、稀にはさしてくれる古本屋の機能は無くなつて仕舞つた。少しの手垢のよごれを我慢すれば、二割、三割方廉い本を供給してくれるといふことが、現代の古本屋の役目である。斯うした種類の本ならあの店といふ看板があつた方がよささうに思ふけれども、商賣に抜け目の無い商賣人が、滔々としてさうした傾向に奔る處を見ると、さうでなければならぬものと見ゆる。是非もない成行である。

私が初めて武藏屋本を見たのは、昭和二年の頃、銀座の夜店で、十四五巻のバラ本と、表紙も、奥付も除き去つた三巻の合本、廿數篇であつた。その後、神田の巖松堂で七八巻、本郷の木内で三四巻を入手したことがあつた。それは別に特殊な興味があつたのでもなく、欲しくて堪らなかつた譯でもなかつた。後年この叢書に意義を發見して、鵜の目、鷹の目、貪るやうに求めて已まぬ熱意が、その當時にあつたら、容易に、豊富な資料を獲られたらうと惜しまれてならぬ。

所在の古書展覽即賣會では、この頃でも、時々獲物にありつくことがある。滅多にある譯ではないが、ある時は、一卷、二巻のバラ本でなく、二十巻、三十巻と、一と山になつてゐることが多くの場合であるので、それを見出した時は、親の敵に巡り會つた思がする。上野の松坂屋の古書展で得た一と山は、出品人の名を見ると、神田の悠久堂であつた。悠久堂は私が二日に一度、三日に一度位は這入る店である。規模に於て神保町有數の店ではあるが、御多分に漏れぬ現代式、新本本店であつて、斯んなかび臭い種類の本には、凡そ縁の遠い

店であるので、彼の店にして、こんな本があるかと意外な思をした。これに類する例は、他にも何度か経験した。古本屋の店頭が、大衆的需要本に占領されて、その面積から驅逐された、斯うした種類の落伍本は、あるにはあつても、物置か、二階の隅の方へ押し込められ、積上げらるゝ運命になつたのである。古本屋が発行する目録を見て、その店を訪ねると、求むる本は店頭の棚からでなく、奥の方から取り出されて来るのを常とする。近年頗る盛になつた古書展の流行は、店頭の圓本化、新本化の傾向に附隨して起つた必然的な現象であつて、物置に驅逐された特殊な本に、時偶ま日の目を見る爲めの機關として發達したものである。目録の發行が盛になつたのも、同じ動機から來た古本屋の自衛策であるが、私の経験した範圍内では、目録で武藏屋本を發見した経験は少い。

ある日、私は本郷區の場末の、お婆さんが一人しよんぼり店番をしてゐる、薄汚い小さい古本屋で、その入口の處に、暑い秋の日を浴びて、埃まみれになつて積み上げられてゐると山の中から、一巻の武藏屋本を掘り出した。その一巻こそは、その時私が未だ持つてゐな

かつたこの叢書の最終巻「天鼓、吉岡染」であつたので、印象が深い。(全盛期に出た本はまさだしも市場に在庫が多く、廿八九年の末期に出たものは尠い。これは當時の出版部數に比例する必然的な結果である。)また或時は目白區の、同じやうな貧しい店で、明治十四年の日付のある、例の改装本の一卷を見出したことがあつた。表通りの、現代式古本屋の店頭から落伍した本は、夫れに相應しい、場末の落伍した古本屋の店先に、時たま見出さるので、これも必ずしも偶然でないといへる。

白木屋の古書展で、大阪のカズオ書店の出品の前に立つて、その主人と久濶を叙し乍ら、ふとその出品中に一群の武藏屋本を見出したことがあつた。その時主人に頼んで置いたら、その後の一年半に、七回に亘つて、百四十數巻を送つてくれた。カズオ本に限らぬことであるが、十卷廿卷と纏つて入手するものは、蒐集が進行するにつれて、舊藏と重複するものが多數であることを已むを得ないが、同時に何卷かの新奇な篇、又は版數の異つたものを寄與して、蒐集者を喜ばしむるのであつた。武藏屋本の探求を頼んで置いた本屋は、カズオ書店

に限らぬのであるが、曾つてそれを報らせてくれた者が無いのに、この大阪の本屋に限つて七回迄も供給してくれたのは、どうした譯であらうか。主人が商賣に熱心で、私の一言をよく耳に止めたからであるか、舊識の間柄であるので、私の興味に同情を持つて蒐集を援けてくれた結果であるか、まさか、武藏屋本は東京に尠くして、大阪に多いとも想はれない。とも角、一般の書肆の手で斯く続け様に供給された事實は、この本は市場の何處かに、在ることとはあるが、需要がないから、商賣人の注意を惹くことがなく、下積になつて仕舞つて、吾人の眼に映ずる機會が無いといふことを物語るものであらう。發行當時、相當の賣行を見たものであるといふ點から見ても、或る量は何處かに遺つて居らねばならぬ筈である。

かやうに武藏屋本は、市場にさらにあるものではないが、あれば値段は不廉いものではない。ノートにある分を拾つて見ると、一卷當りが、六錢八厘、七錢四厘、五錢、三錢八厘、四錢一厘、三錢九厘といったやうな數字が見出さるゝ。概ね一と束いくらになつてゐることが多いので、その一と束の巻數が多ければ、一卷當りが廉いのが當り前である。

本郷の木内は五卷、十卷と纏まつてゐても、一卷づゝに札がついてゐるのが普通で、高きは五十錢、六十錢、安くても三十錢を下らず、高いので有名な木内式であることを免かれなぬ。

カズオ本は、最初の白木屋展の分が、一卷當り六錢ばかり、第二次本が十錢、第三、四次本が十五錢、第五次以下廿錢と遞増してゐる。これは此方から懸賞で、蒐集を激励した形があるので、これ位の足許を見らるゝことは已むを得ないのであつて、市價の標準にはならぬ。

古本、殊に斯うした特殊な古本に、統一された一定の相場がある譯はないが、概観すると、今日の古本屋に於ける武藏屋本の市價は、一卷當り五錢から十錢といふ處であると云へる。發行當時の定價は、終始一部七錢で一貫してゐるのであるが、今日でも、大體定價通りであると思へば、大差はない。

稿を終りて

武藏屋本刊行の研究としては、十四年本の在否、大和文範、近松著作全書と早矢仕民治との關係等、重要な項目であつて、未だ闡明されぬものがあり、到底満足すべくもないが、今はその研究を他日に期する外はない。蒐集し得た重版、異版の百廿餘卷をいぢくつて、未だ記すべきことが無いではないが、一先づ稿を了るものである。

屢々記したやうに、武藏屋本の刊行の徑路は迂餘曲折を極めて、その版歴は頗る複雑なものであるので、上記の書目表は不完全なものであることは勿論である。しかし乍ら、武藏屋本が殆ど世人に忘れられた結果、醵刻された篇目ですら、之を文獻によつて知る由もない現狀より云へば、この不完全な書目も唯一の記録として、有意義なものであると信ずる。この稿の重心は、苦心の蒐集の結果に成つたこの書目だけでも、傳へ度い點にある。

丸屋善七失踪届

(讀書感興 昭和十一年四月號所載)

蛭原八郎氏の「はやしゆうてき早矢仕有的傳」は、近頃私の面白く讀んだものの一つであるが、吾等讀書人にとつて最も興味ある丸善書店について、語つて詳らかならぬ憾みがないでは無い。私は後に武藏屋本といふ明治早期の近松の翻刻本について少しばかり調べたことがあるが、この叢書を刊行した武藏屋又の名叢書閣といふのは、もと丸善の支店から獨立したものであり、その經營者早矢仕民治は、丸善の創立者有的の義理の甥に當つて、十五歳の小僧から、丸善の店員として、有的の薰陶を受けた因縁があるので、丸善に觸るゝことなしに武藏屋を云ふことは出来ない。私が丸善について知つてゐる處は、さうした縁故から嚙つた、云はば副産物に過ぎない斷片ではあるが、「有的傳」を讀んで思ひ浮べる二三の話柄を書いて見度う。

○

横濱で創められた有的の事業が、だん／＼擴がつて來ると、郷里から早矢仕の一族が、一人又一人出て來て有的を授けた。民治もその中の一人で、美濃の國から出て來て、當時横濱の堺町二丁目にあつた丸屋善八書店に入つたのが、明治五年であつた。明治元年新濱町の有的の自宅で創められて、後こゝに移つたこの店は、その頃は隣が丸屋藥店で、その隣りが静々舎といふ診察所になつてゐた。創業後五年を経たその頃の書店は、未だ幼稚なもので、洋書の書名が讀める店員は何人も居なかつた。壁にぶら下つてゐる一枚板があつて、例へばウエラント修身書大、ウエラント經濟書小などと、翻譯した書名の下に、定價が書いてあつた。民治等の小僧連は、一生懸命それを暗記したものであつたが、書物に書いてある題號は横文字であるので、これはそんなに容易く讀めるものでは無かつた。そこで、ウエラント修身書は三行に書いてある、經濟書は四行だ、といふ風に覚え込んだもので、夕方になると、金澤廉吉といつたやうな先輩店員が、誰は甲書を出して來い、誰は乙書を持つて來いと云ふ風に訓練したものであつた。

その頃、松本孝助といふ洋服姿のハイカラ紳士が、有的を訪ねて、屢々店へやつて來た。これは、東京の活版屋で、英和通信とか、和英字書とか、小形の本を發行して、販賣を丸善に委託してゐたのであつた。或時民治がその松本からの送本の荷造を解いてゐると、包紙の中にローマ字を書いたものがあつた。抜いて見ると、それはローマ字綴のいろはに假名を振つたものであつた。これは珍らしいいゝものが手に入つたと、裏打ちをしたりして、民治は大事に藏つて置いた。これを知つたのが清水勝之といふ朋輩で、見せろ、見せぬから喧嘩になり、勝之が無理に取り上げて仕舞つた。それを遣つて堪るものかと民治が武者ぶりついて奪ひ返さうとする。上になり、下になり、取つ組合ひをしてゐる處へ、有的が出て來て、二人は大眼玉を喰つた。結局、印刷物は民治の手に返つたが、見せてやらぬのは民治も宜しくないといふことになつて、こゝで店内で初めてローマ字を學ぶことが出來た。

明治元年十一月の横濱の丸屋善八、四年一月の大阪の丸屋善藏、同年二月の現在の場所の、東京日本橋の丸屋善七、それから五年秋の京都の丸屋善吉、これ等の店名は、さうした名の實在人があつた譯でなく、單なる架空の店名に過ぎなかつた。これは創立者有的の意が、當時の日本に、そんな制度は愚か、未だ概念すらも無かつた法人組織を企圖するに在り、或は他日その制度が出来るのに先廻りをしたのであつたが、當時としては、自然人らしい名で無ければ、届書が通らなかつた處から、善八、善七等の名が捏ち上げられたのであつた。これは丸善の名が現存してゐる文に面白い話題であつて、法律や經濟學で、法人を講義するのに、いゝ教材であると思ふ。

○

これ等の店名に用ひられた善字の出所は、「有的傳」にもあるやうに、有的が郷を出るとき、激勵してくれた恩人高折善六氏を記念する意味から來てゐるに違ひないが、この善六氏の兄弟に、善四郎、善五郎、善九郎等があつて、丸善諸店の名に、これ等の四、五、六、九

の數字を避けてあるのが、偶然とは思はれず、この出所説を裏書きしてゐる。

○
初め横濱の丸屋善八店には、有的の嗣子で現存せられる早矢仕四郎翁が引宛てられたのであるが、翁は初めからの四郎で、曾て現實に善八と呼ばれたことは無い。後に初めて戸籍法が出来た時、翁はうつかり、四郎のまゝで戸籍が出来て仕舞つた。あとで善八で届出づべきだと氣がついた時は、已に遅かつたので、偶々里子にやられてゐたか何かで、戸籍から漏れてゐた弟の六郎氏に善八を名乗らせることにした。店としての丸屋善八の届出の時期と、六郎氏の年齢とが一致しないことなどは、いゝ加減で通つたものであつた。六郎氏は現に丸屋善八の名で名古屋に在る。

○
そのあとが丸屋善七失踪届といふことになる。善七と云ふ名のあと始末に困つて、窮餘の一策として考へられたのが、失踪届を出して、自然消滅するやうにする事であつた。これ

善七は消えて始末がついたと思つてゐたら、未だいけなかつた。丸屋の姓が消えぬと云ふのである。そこで弟の七郎を養子として届出て、丸屋七郎とした。この丸屋七郎氏も生存してゐる。丸屋と丸家とは、當時からだしなく混用されてゐたやうで、丸屋善七の出版物に、丸家と記したものが尠くない。今日では戸籍で確定した姓に、上記のやうに丸家善八あり、丸屋七郎ありで、早矢仕一家に縁談でもあると、丸家姓と、丸屋姓とがごつちやになつて、興信所あたりで大混亂を起しますと、四郎翁が笑つてゐた。

○

明治十四年九月、神田表神保町に中西屋書店が設けられた。丸善チエーンストアの一つで、實は丸善の神田支店である。これは前年頃丸善の洋書部から汚損本や何かを、奥帳場へ引移したものがあつたのを、賣却するのが開店の目的の一半で、その頃ぼつ／＼丸善に洋書を買つて呉れと持込んで來る者があるので、これは古本の商賣が成立つと、目星がついたのが、他の一半の動機であつた。つまり、洋書専門の古本屋であつて、丸善の名で古本商賣でもあ

るまいと云ふ處から、この別働隊が出来たわけである。關根只誠氏に頼んで、つけて貰つたと云ふ掃葉軒といふ別號は、ローズ物を一掃するといふ意味であらう。しかしこの店でも新本を扱はぬでは無かつた。最初は和泉屋勘右衛門といふ、その頃潰れた本屋の主人を引つ張つて來て、この店をやらせた。

○

その次に、明治十六年四月、京橋南傳馬町に叢書閣を開いた。この方は、中西屋の洋書に對して、矢張り丸善の名では困る和書の古本賣買をやるのが、主な動機であつたやうであるが、出版もやり、從來日本橋店でやつてゐた書籍の委託販賣部を、獨立して、擴張する意味もあつた。當時各出版業者へ配布した書面がある。

益々御清榮奉恐賀候陳者別冊規則書ノ如キ一店ヲ設ケ各家御藏板書類賣弘ヲ專業ニ致候間御尊家御藏板ノ書類ヲ見本トシテ御預ケ被下候ハ、大幸ノ至リニ奉存候此段伏テ奉懇願候

頓首

扱人 太田 武之助

負擔人 丸屋 善七

太田武之助は、開店當時の支配人で、負擔人とあるのは、丸善が委託品に對する責任を取る謂であること云ふ迄もない。

○

明治十八年二月、早矢仕民治を叢書閣支配人とした。民治は十二年六月横濱の善八店から、東京の善七店に轉じ、一時は中西屋を兼務したりして、此時に至つたのである。この民治の叢書閣入が、後にこの店を獨立して、武藏屋の別名によつて、所謂武藏屋本を續刊し、或は、「五人女」と「一代男」の二種に止まつたが、西鶴翻刻のトップを切るなど、今日の文運の先驅を勤むる、大きな足跡を遺すに至つた機縁を作つたのであつた。

○

内田魯庵氏などによると、民治は「その後丸善をよして湯嶋天神下に本屋を出したこと

になつて居り、三村清三郎氏の『本の話』にも「丸善を出でて神田宮本町に武藏屋といへる古本屋を開き」とあるが、これは詳しく云へば、有的の仕事が手を擴げ過ぎて、始末におへなくなつたのと、明治十七年の丸屋銀行の破綻の打撃などによつて、整理の必要に迫られたので、叢書閣は民治の仕事にしろと云ふことになつたのである。明治十九年七月、民治は住居を、それ迄現住してゐた南傳馬町の叢書閣の一室から、後の武藏屋本の發行所となつた神田宮本町五番地に移して居り、二十一年の四月には、叢書閣がその宮本町に移轉してゐる。叢書閣が丸善から獨立したのは、多分この時であつたのであらう。

○

丸善を語るつもりで、つい武藏屋の話になつて仕舞つた。しかし乍ら武藏屋に就いて語るべきことは多い。私は筆を改めてそれを書くことを期する。

武藏屋本のこころも

(學鐙 昭和十三年十一月號所載)

○

何は措いても、最初に武藏屋本の書目を掲げて置き度い。近頃では古本屋の店頭はこの本の片影を見ることも稀になつたし、どこの圖書館でも、二三の断片があれば珍しい位で、揃つたものなどは思ひもよらぬ。近松學勃興の機運を作つた斯の意義深き叢書が、湮滅する日も遠くはないと、心細く思はるゝので今にして、せめて篇目だけでも記録して置き度いのである。

武藏屋本の重版は、單本が合卷になつたり、合卷が單本になつたり、合卷の組合せが屢々變遷したり、可なり無軌道な徑路を取つてゐるので、その全貌を描くことは簡單でないから、茲には初版のみを拾つて、直系的な書目を作つて見る。再版を掲げて、括弧の中に初版日付

を記してあるのは、後にいふ如き經緯のある版である。

○

武藏屋本書目

天智天皇	明治	二三・一〇・一	
十二段		二三・一一・九	
日本振袖始		二二・一二・一三	
百日會我(再版)		二三・二・四	(初版 一四・一〇・一四)
戀八卦柱曆(再版)		二三・三・一四	(初版 一四・一一・一〇)
出世景清		二三・三・二七	
關八州繫馬		二三・四・五	
本朝三國誌(再版)		二三・五・三〇	(初版 一五・四・二九)
吉野都女楠		二三・八・二八	

蟬丸・伊達染手綱

一三・一〇・四

心中重井筒・姫山姥（再版）

一三・一〇・一一（初版 一五・四・二九）

今宮心中・最明寺殿百人上臈

一三・一一・二〇

國性爺合戰

一四・一・二〇

双生隅田川・心中宵庚申

一四・二・九

心中天網嶋・源氏烏帽子折

一四・三・七

曾根崎心中・心中二枚繪双紙・博多小女郎浪枕

一四・三・二五（近松叢書一）

傾城反魂香（再版）

一四・四・一四（初版 一四・四・一四）

曾我會稽山

一四・五・一一（近松叢書二）

雪女五枚羽子板

一四・五・一四（同 三）

堀川波の鼓・心中萬年草・世繼曾我

一四・七・一三（戲曲叢書四）

冥途の飛脚・夕霧阿波鳴渡

二四・九・一〇

(同 五)

鎗權三重帷子・壽の門松

二四・一〇・二一

(同 六)

心中双は氷の朔日・五十年忌歌念佛

二四・一〇・三一

(同 七)

生玉心中・女殺油地獄

二四・一一・二九

(同 八)

卯月の紅葉・薩摩歌

二五・一・一八

(同 九)

長町女腹切・淀鯉出世瀧徳

二五・一・二九

(同 一〇)

天 神 記

二五・三・九

(同 一一)

傾城酒吞童子

二五・四・一一

(同 一二)

信州川中嶋合戦

二五・六・八

(同 一三)

百合若大臣野守鑑・卯月の潤色

二五・七・一九

(同 一四)

遊君三世相・碁盤太平記

二五・一一・四

(同 一六)

一心五戒魂

二六・四・二四

(同 一七)

國性爺後日合戦

二六・九・二一

(同 一八)

善光寺御堂供養

二七・四・一七

(同 一九)

唐船嘶今國性爺・右大將鎌倉實記

二八・三・二一

(同 二〇)

津國女夫池

二八・一〇・二六

(同 二一)

天鼓・傾城吉岡染

二九・一・一〇

(同 二二)

近松物は以上三十七卷、五十六篇であつて、その全部は後に「近松世話淨瑠璃」二卷と「近松時代淨瑠璃」四卷とに纏められてゐる。

近松以外の院本では、

大塔宮 曦 鎧

二三・一一・二六

(第三版には、紀海音の「金屋金五郎浮名額」が添付されてゐる)

心中二つ腹帯・末廣十二段 (海音)

二四・二・一三

八百屋お七 (海音)・三世二河白道 (不明)

二五・九・一一

(戯曲叢書一五)

井筒屋源六戀寒晒(一風)・男色加茂侍(錦文流)

二七・六・二一

(同 二二〇)

の四卷、七篇(又は八篇)がある。

○

「曾根崎外二篇」から近松叢書と銘打つたのは、この特別働隊「新編大和文範」を續刊して、近松以外の院本を網羅しやうとする大計畫が成つたので、それと併行する用意であり、「堀川外二篇」から、番號はそのままを踏襲して戯曲叢書と改稱したのは、「文範」が第一編のみで夭折したので、近松以外の院本は、再びこの叢書に挿むより仕方が無くなつた爲めである。叢書番號第廿冊は、誤つて「戀寒晒・加茂侍」と「唐船噺・鎌倉實記」とに重複した。

○

書目に再版を掲げた六篇は、それが武藏屋本としての事実上の初版であるからである。

「三國誌」「重井筒」「姫山姥」の三篇は、丸屋善七出版の「近松著作全書」第二冊（一五・四・二九）の残本を、後日になつて叢書閣（武藏屋）の手で分冊、改装した版があつて、各篇の再版以下は、この版を初版として踏襲する形態を採つてゐるのである。分冊本の奥附は三巻とも元版と同じ十五年五月附になつてゐるので、甚だ紛はしいが、私はその分冊、改装が行はれた時期を、廿三年末であると思つてゐる。長くなるから斯く推理する理由は省略するが、少くとも明治十五年に、叢書閣も、況やそれが神田宮本町五番地に在つた筈もないのである。分本の日附が元版のまゝになつてゐるのは、元版の奥附が本文の裏面に印刷されてゐて、分本「姫山姥」の奥附は、元版の奥附そのものであるので、新に用意された他の二巻の奥附も、それに準ふより仕方がなかつたのである。「姫山姥」の最終四二二頁は「著作全書」第一冊からの通し頁である。

○

「百日會我」「柱曆」「反魂香」の各再版以下に記されてゐるそれ／＼の初版日附は、残念乍ら

私には始末におへぬ。この三篇は、「近松著作全書」第一冊（一四・一一・一〇）と同一内容で、武藏屋本はそれを初版としたと考へ度いのであるが、それと一致してゐる「柱曆」の日附はいゝとして、「反魂香」の一四・四・一四と、「百日曾我」の一四・一〇・一四とは、この解釋を許さぬ。文字通りに解すると、丸屋善七店は、次ぎ／＼に三篇を單行して、その第三本「柱曆」と同日に、三篇を合綴した「著作全書」第一冊を出版したといふことになるが、それは在りさうもないことである。「全書」は「百日曾我」「柱曆」「反魂香」の排列で、通し頁が付いてゐるが、所謂初版の日附による順位はこれと一致せぬし、「反魂香」の初、再版の日附が、一日の差もなく十年の隔りであつたり、「反魂香」と「百日曾我」との初版日附が、正しく六ヶ月の差であつたりすることも、どうやら作爲の跡がある。所謂初版日附は出鱈目であらうか。しかし乍ら、兎も角明記されてゐる日附を、確證なしに、怪しいとばかり葬り去ることは出来ぬ。若し果してさうした日附の版が實在するならば、「反魂香」の一四・四・一四は後に記す「やまと文範」第一集を抜くこと十一日で、院本翻刻の第一着を占むることになるので、頗

る問題である。博雅の教へを俟ち度い。

○
院本の翻刻は、古典の他の部門と同じやうに明治十四年に創まつた「やまと文範」は、第一集がこの年の四月廿五日に出て、翌十五年に第二、三集が、十六年に、それ迄の三巻が各巻六篇を載せたのを、一卷一篇に改めた追刊二巻が出て已んだ。編著者兼發行者は小野田孝吾で、賣捌書肆の筆頭に丸屋善七の名がある。「時代世話劇種本」は歌舞伎新報社の刊行する處で、この年の七月廿一日の「曾我會稽山」を皮切りに、翌十五年末迄に廿六卷廿篇の院本を翻刻した。この年と翌年とに出た丸善の「近松著作全書」二卷、六篇に就ては前に記した如くである。その他、萬字堂の「淨瑠璃大全」二卷（十五年）、我自刊我書の近松三篇一卷（刊期不明、「近松語彙」は十六年刊としてゐる）、春陽堂の「朝顔日記」以下五卷、五篇（十七年）等が相次いで出てゐるが、院本翻刻史は茲に至つてばつたり止つて、そのあとに五年餘りの空白頁を遺し、くつきりとその第一期を劃してゐる。これは時期尙早であつた爲め、

營業成績が思はしくなかつた結果であること勿論で、「近松著作全書」の如き書名から云つて、もつと大規模な計畫であつたのが二巻のみで夭折したものと見るべきであらう。十四年に始まつて、數年にして一旦中絶し、廿二三年になつて再開されたといふ傾向は、院本以外の古典翻刻にも、一般に云へるのではあるまいか。

○

第二期の主人公として登場したのが武藏屋本である。上記の書目で判かるやうに、この叢書刊行の経過は、二十二年十月の「天智天皇」に創まり、廿三年から廿五年に至る三ヶ年が最高潮で、廿六年以後衰兆を示し、廿九年一月の「天鼓・吉岡染」を名残として姿を消し去つた。

この第二期は武藏屋本の獨擅場であるが、面白い現象はこの期間に於ける十種にも及ぶ模倣本の續出である。孰れも武藏屋本そつくりの四六判、假綴ぢ、三五十頁を一巻とする小冊子型で、中には「文學資料」(三々文房)、「文學材料」(文學書院、後に曉鐘閣)、「名作卅六佳

撰(金櫻堂)の如き、或程度良心的なものもあるが、また中には、武藏屋本をその儘印刷したインチキ版數種を數へ、甚しきに至つては、武藏屋本に一貫した、向イ鳳凰丸散らしの表紙までを、そつくり剽竊したひどいもの迄ある。模倣本の續出は、當時における武藏屋本の人氣を測定する資料として、頗る有意義である。

○ 第二期の武藏屋本時代が去ると、第三期の帝國文庫時代が來た。この時武藏屋本は「賣れることは賣れたが、費用もかゝつたので、結局は損失に畢つた」と内田魯庵翁が云つてゐるやうに、力已に盡きて、さなきだに衰亡の運命にあつたのであるが、帝文の出現は、その趨勢に拍車をかけ、挽回、再起の機會を奪つたのであつた。それにしても大局の推移は偶然ではないが、廿九年一月に武藏屋本が退却して、その二月に帝文中の淨瑠璃集の第一本「忠臣藏淨瑠璃集」が出て居り、新舊時代が毛拔合せに續いてゐるのは、一奇でないと思はない。

○

魯庵翁に依れば、往年の「やまと文範」や「近松著作全書」の刊行は、當時丸善の一名店員であつた早矢仕民治の個人的趣味に出るもので、その挫折を遺憾とした民治が、後年叢書閣（武藏屋は院本翻刻専用の別號であつたといふ）を獨立經營するに及んで、宿望を遂げたのが即ち武藏屋本であると云ふことになつてゐる。共に（文範と全書）それが今の丸善書店が發行したと聽いたら、恐らく奇異に感ずる者が多からう。今洋書の取次販賣と、工業書の發行とを看板としてゐる丸善がとは何人も思ふ筈だが、當時この書店に早矢仕民治といふ義太夫狂があつて、この人が勧めて發行せしめたものであつた。（近松二百年忌に於ける講演の節、高野辰之氏の筆記による）と翁は云つてゐるのである。これは丸善にも、武藏屋本出版にも、密接な關係があつた魯庵翁の所説であるし、又民治自ら記して「我等近松翁淨瑠璃の印行に志してより十年に過ぐ」（二五・四・八付、武藏屋本の合本「近松世話淨瑠璃」序文）と云つてゐるのと年代が一致する處から云つても、定説としてよささうである。

然し乍ら、文範、全書の明治十四年には、民治は廿四歳である。古刻以外に何の資料もな

かつた當時に在つて、底本の探求、判讀、翻字等の準備には數年を要したであらうから、初めて計畫が樹てられたのは、その廿歳そこくの時でなければならぬ。何等學問的な素養のない廿歳の若者によつて、斯の劃期的な仕事が創意されたとすることはどうであらうか。前二書の民治獨創説は、武藏屋本の意義を説く上に筋が通つて、餘りにも好都合である丈に、多少の不安がある。そこで魯庵説を最大限度に割引くと、文範、全書刊行の當時、傍觀者として興味を持ち、強い刺戟をうけた民治は、その中絶に失望し、已み難い執着を持つた、その執着が、後年武藏屋本出版の動機となつたと云ふことになる。この程度は動かぬ處で、事實はその中間にあるのであらう。

○

黒色の布表紙に、題簽を貼り付けて、「近松淨瑠璃」と手記した見窄らしい一巻が、早稻田の演劇博物館に藏されてゐる。内容は「曾根崎心中」以下十九篇の武藏屋本を合綴したものであるが、扉に坪内雄藏寄贈と記されて、明かに逍遙博士の手澤本であることが分かる。文

中には隨處に朱筆又は鉛筆の書入があつて、假名書に漢字を傍記し、妥當でない翻字を修正し、科白に鍵を付し、句讀をうち、傍線を引き、或は短い感想や、批評を記入してある。「言々流動」「……し得て妙」等の字句が至る處に見出さるゝ。中にも書入の多いのは、「鎗權三重帷子」の一篇で、「不自然」「突然去る」「露骨」「分らぬ充分」「筆の才が利きすぎる」等の文字が讀まるゝ。試みにこの篇が眞先に取扱はれてゐる近松研究會に於ける博士の所説を讀むと、「この作に不自然の嫌あるは否み難し」「年齢の一週りもちがふ男女の密通といふことは誰が目にも見らるゝ不自然にて」「哀れなれども不自然なり」等の不自然論が繰返へされて、その不自然の三字に圈點が打つてあり、それから川船の條りで船頭の言葉が態とらしくて、近松が平生の技倆にも似ないとて「こゝらは筆任せの走り書きなるべし」とある等、この卷の書入と吻合するものがあつて、研究會に於ける博士のテキストがこの一卷であつたことは疑ふ餘地が無い。惜しむにも餘りあることは、この本は改装の際、心なき取扱者によつて頭部が截斷されて、特に多い上方の空間を利用した書入が、殆ど讀み難くなつてゐることである。しかし

乍ら、近松研究の萌芽であるばかりでなく、日本文學が科學的に取扱はれた嚆矢であることさへ云はるゝこの研究會で、逍遙博士に用ゐられたといふことは、武藏屋本の輝かしき功績であつて、疵物ではあるが、この一卷が世に遺つてゐるだけで、民治瞑していゝわけである。